THE LUTHERAN WORLD FEDERATION

ANGLICAN COMMUNION
IN OVER 165 COUNTRIES

神の恵みによる解放
聖公会–ルーテルの黙想

Liberated by God's Grace: Anglican–Lutheran Reflections

神の恵みによる解放

聖公会－ルーテルの黙想

Librated by God’s Grace: Anglican–Lutheran Reflections

聖公会－ルーテル調整国際委員会 (ALICC)　　編

日本聖公会エキュメニズム委員会
日本福音ルーテル教会エキュメニズム委員会　訳

目　次

日本語版序文 6
序　文 8
「日々の黙想」への序 10

第 1 週：神の宣教

序.....12
第 1 日 14
　行動する神（創世記 1:1-5）
第 2 日 17
　交わりのうちにある神（ローマ 8:9-17）
第 3 日 20
　神と人生の満ち満ちた豊かさ（エフェソ 1:3-10）
第 4 日 23
　住まわれる神（出エジプト記 15:17）
第 5 日 25
　栄光のうちにある神（出エジプト記 40:34-38）
第 6 日 28
　呼び集める神（マルコ 1:16-20）
第 7 日 31
　神と休息（マタイ 11:25-30）

第 2 週：神の恵みによる解放

序.....33
第 1 日 34
　神は与え主（ローマ 11:33-36）

第 2 日 37
すばらしき神の恵み（エフェソ 2:4-10）

第 3 日 39
自由と解放（ルカ 1:46-55）

第 4 日 42
神を知ること（申命記 4:35-39）

第 5 日 45
名によって知られる（ヨハネ 10:1-6）

第 6 日 48
思い悩むな（マタイ 6:25-34）

第 7 日 51
神の平和（フィリピ 4:4-9）

第 3 週：救いは売り物ではない

序.....54
第 1 日 56
救いを買うことはできない（使徒言行録 8:17-22）

第 2 日 59
神と取引できない理由（マルコ 10:35-40）

第 3 日 62
あわれみ（テトス 3:4-7）

第 4 日 65
深いあわれみの心（マタイ 9:35-38）

第 5 日 68
忠実な信仰（申命記 32:3-4）

第 6 日 70
信仰、希望、愛（1 テサロニケ 1:2-5）

第 7 日 73
確信して（ローマ 8:31-39）

第 4 週：人間は売り物ではない

序.....76
第 1 日 77
人類と神の像（詩編 8:4-10）
第 2 日 81
人間と神の似姿（創世記 1:26-27）
第 3 日 84
価値と、人間の尊厳（詩編 139:1-14）
第 4 日 88
文化や人種を超えた価値（詩編 67）
第 5 日 91
年齢や性別を超えた価値（マルコ 10:13-16）
第 6 日 94
障がいと神の恵みの担い手：ジョンの賜物（2 コリント 12:9-10）
第 7 日 96
神の子とされる：「行い」に先立つ「存在」（ガラテヤ 4:1-7）

第 5 週：創造は売り物ではない

序.....99
第 1 日 101
創造とシャローム（平和）（詩編 85:8-14）
第 2 日 104
被造物の管理者として（創世記 1:28-31）
第 3 日 107
搾取と乱用ではなく、世話と利用を（創世記 2:15）

第 4 日 109
神の栄光と地球全体（詩編 72:16-19）

第 5 日 113
創造と共同体（使徒言行録 2:42-47）

第 6 日 115
共有される豊かさ（申命記 15:7-11）

第 7 日 118
安息の年とヨベルの年（レビ 25:1-12）

第 6 週：仕えるための自由―ディアコニア

序.....121

第 1 日 123
宣教を担う人々（ルカ 4:18-19）

第 2 日 125
自由としての奉仕（ローマ 13:8）

第 3 日 128
ディアコニアを生きる神の民（マタイ 25:35-40）

第 4 日 131
宣教における協働関係（パートナーシップ）（フィリピ 1:3-8）

第 5 日 134
受肉と臨在（イザヤ 43:1-3）

第 6 日 137
賜物は分かち合うために（1 ペトロ 4:10）

第 7 日 139
空しくない労働（箴言 16:3）

注.....141
原書について 146
日本語訳について.....147

日本語版序文

2017 年は宗教改革 500 年の記念の年にあたっており、世界中でさまざまな記念行事が行われました。本書も、アングリカン・コミュニオン（世界聖公会）とルーテル世界連盟が協力して、この記念の年を両教会が共に祝うために作成されたものであることは、「序文」に記されているとおりです。

日本においては、日本聖公会と日本福音ルーテル教会の間にすでに数十年に及ぶ対話と協働の歴史があり、これにローマ・カトリック教会を加えた 3 教会の間でも、それぞれに親密な関係を持って対話を続けてきました。このような親しい交わりの中で、過去には 2 教会での合同礼拝が数回にわたり行われ、2014 年 11 月 30 日には世界的にも画期的な、3 教会での合同礼拝を持つことができました。そして、昨年 11 月 23 日には長崎の地において、カトリック・ルーテル両教会による宗教改革 500 年共同記念行事が行われました。

日本聖公会と日本福音ルーテル教会の間でも、宗教改革 500 年を機に何かをいっしょに行えないかと、両エキュメニズム委員会の間で話し合う中で、この黙想集を共同で翻訳・出版するという企画が立ち上がりました。そして、両教会から翻訳ボランティアをはじめとするさまざまな形での協力者を募り、この『神の恵みによる解放―聖公会・ルーテルの黙想』日本語版が作成されました。ご協力を頂きました皆様に、両教会を代表して厚く御礼申し上げます。また、この翻訳出版に関して多大なご協力を頂いた、ルーテル世界連盟のアンネ・ブルクハルト師（エキュメニズム担当幹事）と、アングリカン・コミュニオン・オフィスのニール・ヴァイガース師（プログラム担当主事）に感謝の意を表します。

本書の成り立ちは「序文」と「『日々の黙想』への序」をお読み頂きたいと思いますが、両教会に属する世界中のクリスチャンが書いているということが大きな特徴であり、そこには教会の一致は神学的な対話や合意だけでなく、クリスチャンとしての生活を共にすることのうちに現

れてくるものであるという深い真実が横たわっています。「序文」にあるように、本書は 2017 年のレントにあたって書かれたものですが、年や季節にかかわらずいつ読んでもよいもので、わたしたちがクリスチャンとして生きることについて思い巡らすときのよい助けとなることでしょう。

この文書を協力して翻訳する中で、日本における聖公会とルーテルの交わりがいっそう深く強いものになったとわたしたちは感じています。そして、本書が両教会の協力で作られた文書であるということにとどまらず、これを「いっしょに読む」という形での交わりが生まれることも願っています。そのような地域ごとの両教会の交わりがますます盛んになり、この世界に対して神から頂いている責任を担い合う仲間として、福音を共に宣べ伝えることができるよう、神の豊かな祝福を祈ります。

2018 年 5 月 20 日（ペンテコステ・聖霊降臨日）

日本聖公会　エキュメニズム委員会
委員長　西 原　廉 太
日本福音ルーテル教会　エキュメニズム委員会
委員長　大 柴　譲 治

序　文

2013 年、新たに設立された聖公会－ルーテル調整国際委員会（Anglican–Lutheran Coordinating Committee, ALICC）が作業を開始しました。ALICC に与えられた任務の 1 つは、聖公会とルーテルの関係を発展させる触媒としての役割を果たし、2017 年の宗教改革 500 周年を守るために協力することでした。

ALICC は、宗教改革 500 年に対するルーテル世界連盟（LWF）の公式テーマ、「神の恵みによる解放」を取り上げ、世界に広がる両教会が改革の記念日を共に祝うために、世界中から聖公会とルーテルの 42 名を任命して、6 週間にわたる一連の黙想の執筆を依頼しました。その喜ばしい結果が、この『神の恵みによる解放―聖公会－ルーテルの黙想』です。LWF のテーマやサブテーマ自体と同様に、『神の恵みによる解放―聖公会－ルーテルの黙想』は、16 世紀に始まった改革が今なお進行中であり、今日のキリスト教、ことに私たちの 2 教会が世界大に持つ交わりの刷新に欠かせないものであることを提示しています。

『神の恵みによる解放―聖公会－ルーテルの黙想』は、2 教会の国際委員会によって作成された新しい種類の文書です。これはルーテル世界連盟とアングリカン・コミュニオンの間で合意された声明でもなく、重要な神学的問題を解決するものでもありません。それよりも、神の恵みのうちに、現代を生きる教会として、それぞれが聖公会やルーテルの教会であるようにと召されていること、これを共に思い巡らすための黙想的な資料です。ALICC の希望は、幅広い寄稿者や経験を取り入れたこのような共通の黙想が、神の恵みを共に経験することによって、この特別な年に私たちの 2 教会を家族として近いものにしてくれることです。

それぞれの黙想には 3 つの部分があります。聖書本文、黙想、ルーテルまたは聖公会の伝統文書―特に 16 世紀以降―からの引用です。

このテキストは、小グループまたは個人で用いることができます。それは、レント（大斎節／四旬節）の 6 週間、またはイースターと三位一

体主日の間の週に、黙想の資料として読むことができ、また 2017 年の他のいかなる時期に読んでもよいでしょう。そして、2017 年が遠く過ぎ去ったのちにも、この世界的な広がりを持つ黙想が私たちの教会のための資料であり続けることを願っています。

神の豊かな恵みを、ことに改革を続ける旅の仲間として共に経験すること、これこそ共に生きる生活を深めたいという我々の願いが重なり合うところなのです。

主教 博士 ティモシー・J・ハリス、オーストラリア聖公会
（ALICC 共同議長）
主教 博士 マイケル・プライス、カナダ福音ルーテル教会
（ALICC 共同議長）

「日々の黙想」への序

「聖公会とルーテルがこの500周年の改革記念日をいっしょに祝うことはなぜ重要なのですか？」

この明らかな答えは、「これは友だち同士がすることだから」です。友だちは、お互いの大きな出来事や記念日を覚えあいます。そして今日、聖公会とルーテルとは共に、エキュメニズムの世界で関係をいっそう深めつつありますから、わたしたちはこの関係を世界中で祝いたいと願っています。相互理解と和解を促進する文書（「共通の土台[1]」、「マイセン共同声明[2]」、「ロイリー共同声明[3]」等）や、共同の礼拝・奉仕・宣教を通して生まれた多くの研究に加えて、完全相互陪餐の合意（「ポルヴォー共同声明[4]」、「ウォータールー宣言[5]」、「共同の宣教に召されて[6]」）があります。ですから、聖公会とルーテルが毎年宗教改革主日を祝うことを典礼暦が可能にするように、この宗教改革500周年はさまざまな共同記念の原動力となります。

歴史的には、同じ宗教改革運動を共有する交わりとして、聖公会とルーテルはそのほろ苦い特徴を認識しています。キリストのからだに引き起こされた不協和の傷は後悔の念を引き起こすものでもありますが、恵みによる信仰を通して救いの福音のメッセージを再発見することへの感謝もあります。ルターのペンと、ケンブリッジのホワイトホース［16世紀初頭、ここでケンブリッジの学者たちがルターの著作について議論した］の印刷機から流れ出てきた新しい神学と著作（それゆえ、「小ドイツ」と呼ばれるようになりました）に熱狂した学者たちや、セントアンドルーズとグラスゴーよりオックスフォードとロンドンに至る他の人々が、英国に生じつつあった聖公会にルーテルの影響を及ぼしたことは疑うべくもありません。ルターとヘンリー8世が顔を合わせて出会う機会を得られなかったことは、ルーテルの影響の芽を断ち切り、スコットランドに留まらない、のちのカルヴァン主義の影響への扉を開いたかもしれません。19世紀と20世紀の紛争は聖公会とルーテルを含むものでもありました

が、その背景に抗しての「傷の癒やし」に関する多くの試みは、ヨーロッパや世界の多くの教会において重要な要素でした。

聖公会とルーテルが 2017 年の宗教改革記念式典を共に楽しみに待っていることは、この背景にあらがうものです。そこには、刷新の時を迎えることへの期待があります。研究・祈り・共同の証しを通して、奉仕と宣教の両方で聖霊に満たされた活力の再生を祝う機会が求められています。聖公会とルーテルは、宗教改革の過去、現在の経験、将来の希望の豊かさを掘り下げることを通して、他教派とも共に、双方向そして多方向の協議を刺激し、啓発し続けています。

以下の日々の黙想は、このような誠実さと思慮深さをもって貢献した人々の生活における、この神の恵みの運動への貢献です。委員会は、これに深い感謝を表すものです。

第 1 週：神の宣教

序

ティモシー・J・ハリス、聖公会、オーストラリア

私たちは、動きの中にある神を観察することによって、神をより深く理解するようになります。これを認識することは、神が私たちに神の民として、また神の教会の一員として期待していることを大いに理解する助けになります。これを深く表現したのは、ドイツの神学者ユルゲン・モルトマンでした。「世界における救いを実現すべき使命を与えられているのは教会ではなく、むしろ、父による子と御霊の使命が教会を含んでいるのである。」

私たちの黙想のこの最初の部は、まさしくこの地点から始まります。それは、文化や文脈にかかわらず、あらゆる範囲の人間の経験の中心にある最も重要な問いの一つです。いったい、神は何をしているのか？私たちがそれを探求すればするほど、聖書の物語が愛を中心に置き、希望に満ちた応答をそれに与えていることがわかります。

あることが、なぜそのような形で起こっているのかという問いに答え得ることはまれです。しかし、神が遠くではなく、生の現実と歴史全体の中に間違いなく存在しているということの豊かなしるしを、私たちは見出すことができます。神はこの世界で働いておられます。それは命を与える、創造的で、贖いに満ちた働きであり、とりわけ比類のない愛の豊かさによって特徴づけられます。そのような愛は、動きの中で、この世界での神の宣教を推し進める中で証されています。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」（ヨハネ 3:16）。

神の宣教のレンズを通して見る神を私たちが黙想する時、私たちの神

は、キリストの宣教と模範、そして聖霊の力強い働きに示されるように、「自分自身を遣わされる」神であることに気づきます。私たちが神の業に招かれ、引き込まれるところに、私たち自身の召命感が現れます。洗礼において、私たちはキリストに従う者となり、神の名において仕えるようにと神に呼び出されます。個人的にも教会共同体的にも、私たちは世の光となり、安らぎの場となり、そして「共に宣教する大家族」として集まる共同体となるように呼ばれています。

私たちの宣教についての理解が、神が「自分自身を遣わされる」方であることから始まるように、それは創造のあらゆる次元にわたる神の働きの中で、またそれを通して続けられ、すべてのもの、天と地にあって、キリストに引き寄せられるという目標に至るのです。（エフェソ 1:10 参照）

第１週 ― 第１日

『祈祷書』一般的な感謝

全能の神、慈悲の父よ、わたしたちに豊かな恵みを与えてくださることを感謝いたします。主はわたしたちを造り、わたしたちを守り、この世のものを与え、ことに主イエス・キリストにより世を贖って限りない愛を現し、恵みを受ける方法を示し、後の世の栄光の望みを抱かせてくださいました。どうかこのもろもろの恵みに深く感じ、ただ言葉だけでなく、自らを献げて主に仕え、生涯清い行いによって、主の栄光を現すことができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。誉れと栄光が父と子と聖霊に限りなくありますように。アーメン

行動する神（創世記 1:1-5）

アンナ・マリア・クラッセン、ルーテル、ドイツ

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。

聖書によると、神のみが命を創造することができます。ヘブライ語の動詞 *bara*（創造する）は人間の行いには使われません。これははっきりとした限界であり、同時に私たちを安心させるものです。神は神の創造に対する究極の責任を負われます。それゆえ、神は神の創造物を放りっぱなしにしておくことはなく、親のようにそれらを気遣い、それらを気にかけてくださいます。神はご自身の子どもたちに、「時に応じて」必要なものすべてを与えられます（詩編 104:27）。神を信じることは、「私たちのだれひとりとして、生命も、今数え上げたもの、また数え上げられるうるものすべてを、…自分自身の力では手に入れることも、保有することもできない」（『大教理問答書』）ことを意味し、私たちは神が日々くださるものに感謝しています。

神はこれを見て、良しとされる。神の行いについてのこの記述は、現在形で表現できるでしょうか？創造は良いものですか？毎日、この世界が壊れつつあると念押しするようなニュースを見聞きします。それを「良い」と呼ぶことは皮肉とすら映るかもしれません。しかし、それを良いと呼ぶことはまた、神がその創造物に植えられた可能性への信頼を決して失わないことを示すものでもあります。神はいかなるものの手をも決して離されず、それはいつの日にか明らかになります。創造主である神を信じることは、より大きな全体像を見ることができるのは神だけであると知り、この像が良いものであり、最後にはそれが実現すると願うことです。

神はその創造物を名前で呼びます。神の言葉は神の創造物に命を与える力を持っています。物や人に名をつけることは、それを固有の存在とすることです。名前で人を呼ぶことは、その人の人格を認めることです。神は神の創造物を名前で呼ぶことにより、地上の力によって滅ぼすことのできない尊厳を与えます。神の民はそのもろさにおいて神に属していると、神は言われます。「恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ」（イザヤ 43:1）。造り主である神を信じることは、私たちの尊厳が神の動きに基づくものであること

を実感させ、何ものも「わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない」（ローマ 8:39）ことを確信させることです。

第 1 週 ― 第 2 日

「キリスト者の自由」（1520）

マルティン・ルター

われわれの隣人が（今）困窮し、われわれが余分に持っているものを必要としているように、われわれも（かつては）神の前で困窮して、神の恵みを必要としていたのだったからである。したがって、天の父がキリストにおいて無代価でわれわれを助けてくださったように、われわれもまた、からだとその行いとによって無代価で隣人を助け、おのおの互いに他人に対して、いわばキリストとなるべきである。こうしてわれわれはキリストのものとなり、同一のキリストがすべての人のうちにおられることになる。すなわち、これが真にキリスト者であるということである。

交わりのうちにある神（ローマ 8:9-17）

ロスピタ・シャハーン、ルーテル、インドネシア

神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、

あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。それで、兄弟たち、わたしたちには一つの義務がありますが、それは、肉に従って生きなければならないという、肉に対する義務ではありません。肉に従って生きるなら、あなたがたは死にます。しかし、霊によって体の仕業を絶つならば、あなたがたは生きます。神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです。あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、「アッバ、父よ」と呼ぶのです。この霊こそは、わたしたちが神の子供であることを、わたしたちの霊と一緒になって証ししてくださいます。もし子供であれば、相続人でもあります。神の相続人、しかもキリストと共同の相続人です。キリストと共に苦しむなら、共にその栄光をも受けるからです。

香港のルーテル神学校で博士課程の学生だった時、2013 年 6 月に実施された、16 人の学生によるイスラエル研修旅行に参加しました。そこにはイエスとの特別な出会いがあると確信していました。エルサレム旧市街の聖墳墓教会、ベツレヘム、ガリラヤ湖などの多くの聖地を見て、そこで祈ることはすばらしいことでした。しかし、私が願っていたようなことは感じられませんでした。最後の日まで、特別な感情、聖なる方との特別な出会いはありませんでした。

香港への飛行機を待つ間、テルアビブ空港で夕食を食べました。香港の 2 人の学生と私は、イスラエルの典型的な食事であるファラフェルとフムスを食べることにし、スープといっしょに注文しました。食べ物をテーブルに運んでいる時、どれがファラフェルでどれがフムスかと友人たちに聞きましたが、誰もそれを見分けられないことがわかり、爆笑し

てしまいました。通りかかった男の人が立ち止まって、どれがフムスであるかを教えてくれましたが、ファラフェルがないことがわかりました。売り手が私たちをだまそうとしていたように思われたので、とてもがっかりしました。

この新しい友人は、店に戻る私たちについてきてくれました。彼は店員にレシートを見せて、私たちにファラフェルが出されるのを見てから立ち去りました。私たちはようやく自分たちのファラフェルにありつき、豊かな幸せを感じながらそれを食べました。味のためではなく、隣人のうちにキリストと出会うということが何を意味するのかわかったからです。私たちはこの人を知りませんでした。名前すらわかりません。たぶん向こうは私たちを忘れてしまったでしょうが、私たちは彼を忘れておらず、これからも忘れることはないでしょう。

どこで神に出会うのでしょうか？国籍、民族、宗教、宗派の境界を越えて、他の人と私たちとの交わりの中で神に出会います。神はどこにおられますか？神は私たちとの交わりの中におられます。私たちは神の子なのですから。「神の霊によって導かれる者は皆、神の子なのです」（ローマ 8:14）。

第１週 ― 第３日

「呼びかけ」、詩集『神殿』から

ジョージ・ハーバート

来ませ、わが道、わが真理、わが生命よ。
わたしたちにいのちの息を与える道、
すべての争いに終わりを告げる真理、
死をうち滅ぼす生命。

来ませ、わが光、わが祝いの時、わが力よ。
祝いの時を照らす光、
争いを和解へと導く祝いの時、
その祝いの客を呼び集める力。

来ませ、わが喜び、わが愛、わが心よ。
何ものも動かし得ぬ喜び、
何ものも引き離し得ぬ愛、
愛のうちに喜ぶ心。

神と人生の満ち満ちた豊かさ（エフェソ 1:3-10）

スーザン・ベル、聖公会、カナダ

わたしたちの主イエス・キリストの父である神は、ほめたたえられますように。神は、わたしたちをキリストにおいて、天のあらゆる霊的な祝福で満たしてくださいました。天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、御自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。神がその愛する御子によって与えてくださった輝かしい恵みを、わたしたちがたたえるためです。わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。神はこの恵みをわたしたちの上にあふれさせ、すべての知恵と理解とを与えて、秘められた計画をわたしたちに知らせてくださいました。これは、前もってキリストにおいてお決めになった神の御心によるものです。こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです。

その伝記の著者、アイザック・ウォルトンによると、宗教改革期の英国の偉大な詩人であり司祭であるジョージ・ハーバートは、こう言っています。「［自分の詩は］自分の魂を主人であるイエスの意志に従わせる前に、神と私の魂の間に起こった多くの霊的葛藤を描いたものです。この方に従う中で、私は今、完全な自由を見つけました」。ここには時代を超越した、神の愛の重みとの魂の闘いがあります。

ハーバートは、私たちが皆そうであるように、自分自身がいつも運命の主人公であると思い続けたいと考えていました。私たちはしばしば、神ご自身の家を神が私たちの中に完全に建ててしまわれないようにします。また、キリストの豊かさの中に十分に身を浸さず、そうして自分自身が愛と生活を他の人と分かち合わないようにすることで、生活におけるイエスの影響を最小限に抑えようとします。自分の主体性を保つために、キリストにある生活が自分の欲望に及ぼす影響を最小限に抑えようとしているのです。

しかし、聖霊の力によって完全に自分自身をささげる勇気を持つならば、キリストにある生活に向かう新しい種類の自由が現れます。これは、神に原型を持つ深遠な豊かさが、私たちの信仰の中心にあるからです。この人生の豊かさは、自己中心の霊性ではなく、自分自身と信仰の賜物を他者に提供することのうちに見出されます。神は深いところで自由と愛を与えてくださっており、私たちは豊かに与えられたものからささげるのです。

私たちは単にクリスチャンであることはできません。私たちは信仰を分かち合わなければなりません。私たちは良き知らせ、福音を告げ知らせるために遣わされる者です。私たちは、神の名によって癒やし、神の名によって愛し、神の名によって説教し、教える者です。

神はいつも願っておられました。すべての永遠から、神は私たちを心開かれたものとして創造されました。心のまなざしで、世界の中で主が働いている場所を見、情熱と愛と奉仕をもってそれを祝福するようにと。

これが自由です。これが神の宣教です。これが人生の満ち満ちた豊かさです。

第 1 週 ― 第 4 日

キリストの言葉「これは私の体である」は、熱狂主義者に抗して堅く立っている（1527）

マルティン・ルター

神は全被造物の一つ一つに、内にも外にもそのすべてに、端から端まで、上にも下にも、前にも後にもかならず存在し、そのご自身の力をもって何ものよりも確かに、全被造物のうちに存在しておられる。

住まわれる神（出エジプト記 15:17）

タピオ・レイノネン、ルーテル、フィンランド

あなたは彼らを導き、嗣業の山に植えられる。主よ、それはあなたの住まいとして、自ら造られた所。主よ、御手によって建てられた聖所です。

神はどこに住んでおられるのでしょうか。神を見出すことができる、特別な場所はあるのでしょうか。神がお住まいになるのに、どれくらいの場所が必要でしょうか。

神は私たちが想像できるもの以上のものです。神をお迎えするのに十分な大きさの家や教会など、建てることはおろか、想像することさえできません。神を一つの場所に閉じ込めることはできません。それでも、

神は私たちの教会、私たちの礼拝の場、そして私たちが住む家におられます。神は、私たちを住まわせるための創造物を与えられました。私たちの体内のすべての細胞と共に存在し、空気を吸い、太陽を感じ、神の似姿としての私たちの仕事を愛し、それを成し遂げるためです。神は神の創造物に住んでおられますが、その境に閉じ込められているわけではありません。しかし、もし神がどこにでもおられるなら、どこで神を探せばよいのでしょうか。

断食している間、私たちは心の中に神のための場所を作ります。神はすでにそこにおられます。神が私たちを神の似姿に創造されたからです。私たちの四旬節（大斎節）の規律は神を喜ばせるためではありません。むしろ、私たちが心を空にして、神を愛することや、神の想いと存在を知ることを妨げる、すべてのことを捨て去ることができるようにそうするのです。愛と神の臨在は、私たちを豊かにし、私たちの心を輝かせ、よりはっきりと見ることができるようにします。

出エジプト記の中で、モーセとイスラエル人は、彼らを神の住まいに導き、神の山に植えると約束された神に賛美を歌います。私たちはその賛美に加わり、神が神の聖なるみ住まいの地である祭壇に私たちを導いてくださるようにと祈ることができます。祭壇は、神を見出すことのみならず、ユーカリスト（聖餐）のサクラメント（聖礼典、聖奠）に臨在している、神のみ子イエス・キリストのうちに神に出会う場所です。私たちは祭壇で、神が住んでおられるところ、神のみ言葉と聖餐の中に、真に根を張ることができます。しかし、神は祭壇に留まってはおられません。神は奉仕と愛を通して神の使命を果たすために私たちを世界に遣わし、私たちと共に、また私たちのうちに住まわれます。

神はあまりに力強く、どこであってもそこを神の場所とすることはできません。私たちには限界があります。しかし、神は私たちの限界のうちにご自身を置くことを選ばれたのです。神はみ子のうちに私たちのところに来られ、私たちの一人として私たちのところに住まわれました。そして、神は私たちと、世の終わりまで共におられます。

第 1 週 ― 第 5 日

主教 トーマス・ケン（1637-1711）による聖歌から

神をたたえよ、この方からすべての祝福があふれ出る。
神をたたえよ、すべての被造物はその下に。
天の万軍よ、上におられる神をたたえよ。
父と子と聖霊をたたえよ。

栄光のうちにある神（出エジプト記 40:34-38）

パウロ・ウェチ、聖公会、ブラジル

雲は臨在の幕屋を覆い、主の栄光が幕屋に満ちた。モーセは臨在の幕屋に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。雲が幕屋を離れて昇ると、イスラエルの人々は出発した。旅路にあるときはいつもそうした。雲が離れて昇らないときは、離れて昇る日まで、彼らは出発しなかった。旅路にあるときはいつも、昼は主の雲が幕屋の上にあり、夜は雲の中に火が現れて、イスラエルの家のすべての人に見えたからである。

私の魂を高く挙げ、前に進むようにと私に促す 2 節を引用して、このささやかな黙想を始めたいと思います。

> 神の栄光は人が生きていることであり、人の生命とは神を見ることだからである（リヨンのエイレナイオス『異端反駁』、第 4 巻、20:7、*Gloria Dei vivens homo, vita autem hominis, visio Dei*）。
>
> あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい（ローマ 12:2）。

創造は、過去、現在、そして未来において、神の宣教の地平であり「場」です。神の熱情の結果が破壊され、その存在そのものが危険にさらされています。信仰の民として、私たちが毎日直面している現実―増し加わる不平等・貧困・暴力・差別・疎外とその結果―に照らして、沈黙を保ったり受動的であったりしてはなりません。神の名と神学論とは、これらを正当化するためにしばしば用いられます。

私たちの信仰は常に「実践」（*ora et labora*―祈りと行い）です。私たちは、時代のしるしを読みとり、自分の信仰と価値観を振り返り、そうして栄光のうちにある神を経験したいという深い望みを達成するよう行動します。歴史を通して、聖書の言葉と偉大な証しによって伝えられた神の経験から、私たちは学んできました。「善を行うことを学び、裁きをどこまでも実行して、搾取する者を懲らし、孤児の権利を守り、やもめの訴えを弁護せよ」（イザヤ 1:17）、「誇る者は、この事を誇るがよい。目覚めてわたしを知ることを。わたしこそ主。この地に慈しみと正義と恵みの業を行う事、その事をわたしは喜ぶ、と主は言われる」（エレミヤ 9:23）。

私たちの信仰は、自分たちをこの方向に向かわせ、絶望と破壊のただ中にあって神の国のたとえとなるという、情熱的（雅歌）で変革的（預言者的伝統）な望みを追求し続けるよう求めています。私たちはそれぞれ固有の状況に身を置いていますが、それにもかかわらず、他の人といっしょに、決して一人ではなく進み続けるという、私たちの不屈の精神

を強めるのが希望です。ご自身の栄光のうちにある神は、変わり、変えるという私たちの内なる力をあらわにしました。これが私たちの召命です。私たちの心、思い、議論（神学）、行動（宣教／開発）― *ora et labora* ―のうちに、神の想いを明らかにすること。貧困、暴力、差別、特権、孤独、そして人類と自然を抑圧するあらゆる構造、これらの根絶を目指して働くこと。私たちが強い責任感を持ってこの役目を引き受ける中に、私たちの召命は現れます。

神の限りないあわれみと恵みによって、私たちが祝福され強められ、多様性の中で一つとなり、愛のうちに共に働いていくことができますように。

第１週 ― 第６日

『祈祷書』三位一体後第６主日特祷

あなたを愛する者のために、人の思いに過ぎた良い賜物を備えてくださる神よ、どうかわたしたちに何ものよりもあなたを愛する心を得させ、わたしたちの望みうるすべてにまさる約束のものを与えてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

呼び集める神（マルコ 1:16-20）

アン・トムリンソン、聖公会、スコットランド

イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。また、少し進んで、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼベダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

ジョージ・ハーバートの詩「愛 III」はこのように始まります。「愛は私に仰せられた、ようこそ！　と。」　神はこのように私たちを呼び出

し、集められます。無理強いしたり強制したりせず、私たちの側の利益や価値に関することでもなく、事前に能力の証明を求めたりもされません。神はそのように呼びかけたり集めたりはなさいません。

そうではなく、神の解放的な恵みは「優しく尋ねる」愛の声で私たちに来ます。その贈り物は、私たちに向かって走り続ける方により、ただで無条件に提供されます。そして、もし私たちがこの惜しみない招きに自分自身を開くなら、いきなり神の抱擁に包み込まれ、神の働き、神の宣教にただちに（εὐθὺς）引き込まれていることに気づきます。

この抱擁は神格の中心にあり、神の自己啓示を表現しています。神は位格（ペルソナ）［三位一体における父・子・聖霊］の交わりであり、その愛の三位一体の働きを宣べ伝えます。宣教に参加するということは、世を愛されたがゆえに「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです」（1 ヨハネ 4:9）という、神が愛する世界へのこの抱擁の働きに参加することです。

この抱擁はすべての人のためのものであり、暖かく抱きしめる中で、私たちは他者の傍らにいる自分自身を見いだします。漁師や愚かな者、いっしょにいても私たちがそれほど楽しくない人々、私たちが選んでいない人たちのそばにいること。それがこの抱擁の広さです。それはすべての人のためです。

この抱擁は私たちを活気づけ、送り出します。この愛を他の人と分かち合い、互いに宣言と招きの言葉を告げるために。私たちが経験したような避け所・逃れ場・み守りを、他の人に示すための奉仕の行いにおいて。神の恵みの連なりに加わるために。

それはガリラヤの海で、この 2 組の兄弟が経験するものです。それが必要とするのは、「すぐに見つける愛」による完全な単純素朴さを伴う、「私に従いなさい」という言葉です。そして、ただちに彼らは神の宣教に巻き込まれ、新しい方法で網を投げるために送り出されました。「すぐに、ここで、今、いつも…」

同様に、愛は私たちをその抱擁に集めます。愛のメッセージを再び語

らせるために、同じ息を私たちに送ります。他の人のために私たちを外に向かわせます。感謝と、漁師の熱意と、応答の備えをもって、世界に向けられた神の和解の働きに加わりましょう。

第 1 週 ― 第 7 日

『祈祷書』就寝前の祈りから

恵み深い神よ、この所に臨み、この夜を通してわたしたちをお守りください。そして日々の生活の移り変わりや出来事に疲れたわたしたちが、永遠に変わらぬあなたにあって憩うことができますように。わたしたちの主、イエス・キリストによって。

アーメン

神と休息（マタイ 11:25-30）

サミュエル・ダワイ、ルーテル、カメルーン

そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかには、父を知る者はいません。疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛（くびき）を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」

「休息」を仕事、運動、活動からの休みとして定義するならば、それは静かで落ち着いた時間という以上のものではないと考えられかねません。神から来る休息は賜物であり、それを期待していない人たちにさえ与えられるものです。

このマタイの聖書箇所において、神が私たちに与えてくださる休息は、私たちを父と救いに近づかせるものです。それは父によって送られたみ子によってのみ与えられます。「知恵ある者や賢い者」はこの福音を拒みました。父は慈しみ深い心によってそれを「幼子」に示し、それを「知恵ある者や賢い者」から隠されました（マタイ 11:25-27）。

イエスのメッセージを聞く準備ができていると私たちが思うような人々が、福音を受けるのではありません。神の休息の賜物を受けるためには、物乞いや子どものように手を開き、神のところに行かなければなりません。「知恵ある者や賢い者」は、イエスのメッセージを理解することができず、その人たちが神を理解できると信じている限り、神を知ることはできません。神から来る休息は単に与えられるのではなく、まずそれを求めなければなりません。神の恵みは責任と共に届けられるのです。

マタイはイエスの教えを次のように語ります。「わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽い。」ここでイエスは、重さと疲れについて逆説的な言葉を用い、まったく正反対のことを示そうとしています。その軛は負いやすく、その荷は軽いからです。

神が与えてくださる休息は、イエスが父によって送られたことを認めるだけでなく、軛や重荷を負わせないイエスを受け入れることでもあります。イエスのメッセージは、自分の努力によって神を探すことに疲れている人や、キリスト教が聖書を超えて付け加えた伝統によって重荷を負わせられている人々にとって、負いやすく軽いものです。私たちは自分自身で神を知ることはできません。空腹で喉の渇いた子どものように、私たちは謙虚に神のもとに来ます。イエスは魂の休息と、内なる回復と再生を約束されます。

第 2 週：神の恵みによる解放

序

ジョン・リンジー、聖公会、スコットランド

「神の恵みによる解放 (Liberated by God's Grace)」は、ルーテル世界連盟（LWF）が宗教改革 500 年を記念して発行した一連の小冊子を総括する題名であり、それらの掲げる主題を反映するものです。LWF エキュメニズム担当幹事のアンネ・ブルクハルトはその 1 冊目の序文で、この主題が宗教改革の教義の中心であることと、その両面性とについて語っています。彼女は、「神の恵みによって解放されるとは、何から、そして何へと解放されることなのか」という、同冊子の最初の論文にあるゴットフリート・ブラークマイアーの問いかけを引用しています。

人類と万物を無条件に受け入れ、あわれみを注ぐその恵みには、駆け引きなく心からなされる、同様の愛と奉仕によってのみ、忠実に応答することができます。私たちが愛するのは、神がまず私たちを愛してくださったからです。それは私たちが気に入られるためでも報いを得るためでもなく、個人としてまた共同体として、日々の生活への感謝を示すためです。

それはあたかも、ウィリアム・H・ヴァンストン作詞の「創造主への賛歌」にあるように、新しくされた命、造り変えられた創造物が、あふれるほどの神の愛に導かれて感謝の歌を歌い、宇宙が先唱と応唱によるすばらしいカンティクル（詩頌）に応えて共鳴しているかのようです。第 2 週の伝統文書と聖書とは先唱となり、日々の黙想はその応唱となります。双方の声に耳を傾けることで、私たちを死に追いやる恐怖から私たちを活かす信仰へと、神の恵みによって解放されるという自らの経験を分かち合いたいという気持ちにさせられるかもしれません。

第 2 週 ― 第 1 日

『祈祷書』降臨節第 2 主日特祷

わたしたちを教えるために聖書を記させられた主よ、どうかこれを聞き、これを読み、心を込めて学び、深く味わって魂の養いとさせてください。また、み言葉によって強められ、耐え忍ぶことを習い、み子によって授けてくださった限りない命の望みを抱き、常にこれを保つことができますように、み子イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

神は与え主（ローマ 11:33-36）

ステファン・チュー、ルーテル、香港

ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定めを究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう。
「いったいだれが主の心を知っていたであろうか。
　だれが主の相談相手であっただろうか。
　だれがまず主に与えて、
　その報いを受けるであろうか。」
すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

神は与える方であり、私たちは受ける者です。「ローマの信徒への手紙」は、このことが神と人間との関係において鍵となる役割を果たすと宣言しました。福音そのものが、神は厳格な取り立て人ではなく、キリストによる寛大な与え主であると明言しています。聖霊は、福音を聞いて信仰によってそれを受ける人々に、キリストが十字架の上で獲得された救いを与えてくださいます（ローマ 1:16-17）。

マルティン・ルターは、神の義は妥協なく厳格な要求であると考えて絶望しました。彼は、この義による要求の基準には決して届くことができないと悟りました。しかし、「神の義」という言葉の本当の意味を見出し学んだとき、実は義というのは神から与えられている、恵み深い賜物なのだと理解したのです。突然、ルターは光を見ました。聖書を理解することを妨げていたものは取り去られ、天の国への扉が開かれました。信仰による義認とは、神の義は自分の行いなどによって得られるものではなく、信仰によって与えられる神の恵み深い賜物であると信じるということです。それは、すべての罪人を悔い改めさせ、義とする賜物です。

神は私たちを創造され、体に、手に、脚に、生命の息を吹きかけてくださいました。これらはすべて恵み深い、無償の賜物です。ひとつとして、私たちの手によって、また誠実さによって得られたものはありません。パウロが、「いったいあなたの持っているもので、いただかなかったものがあるでしょうか。もしいただいたのなら、なぜいただかなかったような顔をして高ぶるのですか」（1 コリント 4:7）と述べているとおりです。また、ルターは「キリストの聖餐について、信仰告白 1528 年」の中で、「父は、天と地とすべての被造物とともに、ご自身をもわれわれに与え、これらのものをわれわれに仕えさせ、役だたせてくださるのである」と述べました。

そのうえ、キリストに与えられた新しい命は、創造によって授かったものと同じです。父と共に私たちと和解した子は、私たちを父のもとに連れ戻してくださいます。論じ終えた後、パウロが神をほめたたえたのは不思議ではありません。「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いこ

とか。...すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。栄光が神に永遠にありますように、アーメン」（ローマ 11:33-36）。

今ここで、キリスト者はその生活のただ中に日々神の恵みを与えられています。み言葉とサクラメントを通して、聖霊が私たちに赦しの賜物を分け与えてくださり、そして私たちを隣人への贈り物に変えてくださいます。ルターは『小教理問答書』で、「罪の赦しがあるところに、いのちも救いもあるからだ」と述べました。私たちは永遠の命を与えられています。これはすなわち、徹底して神を信じること、神との親密な関係を築くこと、そして神の善さを日々喜びとすることを意味しています。永遠の命というのは、未来にのみあるのではなく、今ここにおいて神の家族の一員となる約束のことでもあり、神と共に統治するように任命されるということです。黙示録では次のように述べられています。「彼らをわたしたちの神に仕える王、また、祭司となさったからです。彼らは地上を統治します」（黙示録 5:10）。それゆえ、創造のときも贖いのときも、今も永遠も、神はいつも与え主であり、私たちは喜びに満ちて受ける者なのです。

第 2 週 ― 第 2 日

「喜びにかがやく日」第 4 節

パウル・ゲルハルト（1607-1676）

大いなるみ神にぞ　　わが持てるたからみな
捧げまつり、ぬかずかん　くだかれたる心より
あふれいずるほめ歌を　　神はよみし受けまさん

すばらしき神の恵み（エフェソ 2:4-10）

カミヤ・ウェイズ・ボール、ルーテル、パラグアイ

しかし、憐れみ豊かな神は、わたしたちをこの上なく愛してくださり、その愛によって、罪のために死んでいたわたしたちをキリストと共に生かし、―あなたがたの救われたのは恵みによるのです―キリスト・イエスによって共に復活させ、共に天の王座に着かせてくださいました。こうして、神は、キリスト・イエスにおいてわたしたちにお示しになった慈しみにより、その限りなく豊かな恵みを、来るべき世に現そうとされたのです。事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるのではありません。それは、だれも誇ることがないためなのです。なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前

もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。

神の恵みというテーマに、いつも私は惹かれます。それは、私たちの神は善い方であり、見返りを要求しない方であること、私たちの神は売り物の神ではなく、愛によって私たちを気にかけ、守ってくださる方であることを知るという、すばらしい喜びを与えてくれるからです。

時に、神の恵みを理解することは難しくもあります。私たちは、何事にも見返りが期待されることにあまりにも慣れてしまっているので、神の愛を無償で受けられるということは、私にとって大きな驚きでした。堅信のための学びや教会の青年キャンプのおかげで、神は私たちに何も見返りを求めず、神の愛や赦し、救いを無償で与えてくださることに気づくことができました。

私たちは、青年たちの集まりを通して豊かな経験をしました。クリスマスには、バイク事故で四肢に麻痺のある青年を尋ねました。私たちはその青年の家を訪れ、歌を歌い、共に喜び、彼と共に聖餐を分かち合いました。彼のことは私の中に、本当に印象深く残っています。身体を動かすときには常に介助が必要であるにもかかわらず、彼は喜びと信仰に満ちあふれていました。彼を訪ねた私たち青年グループの一人ひとりが、彼が私たちから受けたよりもはるかに多くのものを彼から受け取ったことに感銘を受けました。

この経験は、私の人生に刻み付けられ、私自身の目で神の愛を見る助けとなっています。それは風を見ようとするくらい非常に難しいことですが、私の顔に吹く優しいそよ風のように心地よく感じるのです。

あなたがどこにいる時にも、あるがままのあなたとして神の良さにあずかるようにと、皆さんをお招きします。なぜならそれは神の恵みと愛からくるものだからです。

第２週 ― 第３日

『祈祷書』朝の礼拝の特祷

親しみを好み、平安を与えてくださる神よ、永遠の命は主を知ること、完全な自由は主に仕えることにあります。どうか主の僕らをすべての敵から守り、わたしたちがあらゆる困難を恐れず、堅く主に頼ることができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

自由と解放（ルカ 1:46-55）

ゼファニア・カメータ、ルーテル、ナミビア

そこで、マリアは言った。
「わたしの魂は主をあがめ、
わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。
身分の低い、この主のはしためにも
目を留めてくださったからです。
今から後、いつの世の人も
わたしを幸いな者と言うでしょう、
力ある方が、
わたしに偉大なことをなさいましたから。
その御名は尊く、
その憐れみは代々に限りなく、

主を畏れる者に及びます。
主はその腕で力を振るい、
思い上がる者を打ち散らし、
権力ある者をその座から引き降ろし、
身分の低い者を高く上げ、
飢えた人を良い物で満たし、
富める者を空腹のまま追い返されます。
その僕イスラエルを受け入れて、
憐れみをお忘れになりません、
わたしたちの先祖におっしゃったとおり、
アブラハムとその子孫に対してとこしえに。」

ルカ 1:46-55 に基づくマリアの賛歌

今日、私は自らの心と、
私をとりまくすべてのものを見つめ、
マリアの賛歌を歌います。
私の命は主なるわが神を、
私を自由にしてくださった方をほめたたえます。
私の屈辱と苦悩のうちに、
主は私を心に留めてくださいました。
今から後、私をのけ者にし、無視した人たちは、
私を見て幸せな者と言うでしょう。
私の慎ましい生活の中で、
主がなさっているすばらしいことのために。
主のみ名は、この世界の他の名とはまったく異なります。
いつの世にも、主は虐げられる人の側におられました。
出エジプトの時のように、主はその力強いみ腕を振るい、
虐げる者をその悪巧みとともに打ち散らされます。

主は権力ある王をその王座から引き降ろし、
蔑まれた人を高めてくださいます。
そして今日もまた、そのようになさいます。
主は搾取された人を良い物で満たし、
搾取する者を空の手のまま追い返されます。
そして今日もまた、そのようになさいます。
主が私たちの父母にしてくださった約束は、
今日もなお真新しいままです。
それゆえ、私の中で燃えている解放への希望は、
決して消えることがありません。
主は私をお忘れになりません。
今ここで、そして死してのちも、とこしえに。

第２週 ― 第４日

『大教理問答』第 1 戒

マルティン・ルター

ひとりの神とは、人間がいっさいのよいものを期待すべきかた、あらゆる困窮に際して避け所とすべきかたである。したがって、ひとりの神を持つとは、ひとりの神を心から信頼し、信仰することにほかならない。私がしばしば述べたように、ただ心の信頼と信仰のみが神と偶像の両者をつくるのである。信仰と信頼とが正しくあれば、あなたの神もまた正しいのである。反対に信頼が偽りであり、正しくないところにはまことの神もまたいましたまわない。なぜなら、この二者、すなわち信仰と神とは相ともに一体をなしているからである。そこで今あなたが（私は言うが）、あなたの心をつなぎ、信頼を寄せているもの、それがほんとうのあなたの神なのである。

神を知ること（申命記 4:35-39）

ジョン・ジボー、聖公会、カナダ

あなたは、主こそ神であり、ほかに神はいないということを示され、知るに至った。主はあなたを訓練するために、天から御声を聞かせ、地上に大いなる御自分の火を示された。あなたは火の中

からその言葉を聞いた。主はあなたの先祖を愛されたがゆえに、その後の子孫を選び、御自ら大いなる力をもって、あなたをエジプトから導き出された。神はあなたよりも強大な国々をあなたの前から追い払い、あなたを導いて、今日のように彼らの土地をあなたの嗣業の土地としてくださった。あなたは、今日、上の天においても下の地においても主こそ神であり、ほかに神のいないことをわきまえ、心に留めなさい。

比較的最近まで、「何を知っているかではなく、誰を知っているか」が最も大切なことだと言われていました。それが、Facebook のようなソーシャルメディアの到来によって、もはや「誰を知っているか」ではなく「何人を知っているか」が重要となりました。ここでは、「知っている」ことと「知られている」ことが混同されています。誰かについて面識はないが知っているということや、ましてや連絡帳や Facebook の友人リストに誰かが載っているだけというのは、その人のことを直接知っているのと同じではありません。

英語の *know*（知る）の語源は、ラテン語の *cognoscere* と関係しており、その語源はギリシャ語の *gnosis* にまで遡ります。これらの語は「～を理解する」・「～を認識する」・「～と親しい」ことを意味しています。ここでの「知る」「知られる」は、他人との生きた出会いから起きることです。そしてそれはお互いを深く知っていくことにつながります。

聖書は、「神を知る」ということをこの意味において理解しています。少しだけ、あるいは多く、神について知るということとは違います。それは神体験についてであり、神によって認識されるという体験です。「力を捨てよ、知れ、わたしは神。国々にあがめられ、この地であがめられる」（詩編 46:11）と詩編作者は記します。「わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる」（1 コリント 13:12）と聖パウロは記します。

申命記は出エジプト後のイスラエルの民に、そしてその子孫たちに「主こそ神であると知れ」（申命記 4:35）と神を知るよう求めます。神についての彼らの認識の礎は、推論や理論ではなく、歴史であり、神による解放の経験、すなわち「主はあなたの先祖を愛されたがゆえに、その後の子孫を選び、御自ら大いなる力をもって、あなたをエジプトから導き出された」（申命記 4:37）という出来事に起因するものです。

私たち一人ひとりが聖書と共に歩むのです。神の恵みによる解放を知ることは、私たちが神によって愛され、解き放たれた神の子となる存在であることを知ることです。

第 2 週 ― 第 5 日

アオテアロア・ニュージーランド・ポリネシア聖公会の洗礼式文より

エ･テ･ワナウ･ア･テ･カライティ／キリストにある友よ、
神は愛です。神は生命を与えられます。
わたしたちが愛するのは、まず神が愛してくださったからです。

洗礼において、神はこの愛を宣言し、
キリストにおいて、神はこれに応えよと呼びかけられます。

名によって知られる（ヨハネ 10:1-6）

テ・キトヒ・ウィレム・ピカアフ、聖公会、ニュージーランド

「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

自分が何者であるかという問いは、誰しもの人生において、特にキリスト者にとって、重要なことです。今日のアオテアロア・ニュージーランドにおけるマオリのキリスト者にとって、それはとりわけて重要です。

人にとって、自分の親類たちとどのように関係しているか、ある共同体に属するということが何を意味するのか、というのは根本的なことがらです。所属するという感覚から、特定の責任と責務が生じます。およそ 180 年前、自分のトゥプナ（祖先）がキリスト教に改宗したと知るとき、それは私が誰であり、誰に属しているかということを再確認する以上の意味があります。それは一人の人にとっての人生、そして歴史を通して働く、神の力を語っています。その力は神の愛、神の恵み、そして神の平和の力です。この結果として、一人ひとりの、またあらゆる世代の信仰の民の人生に変革、刷新、そして解放がもたらされます。

私のファーストネームは母方の祖父から与えられました。彼は私の生まれた日にその名を付けました。セカンドネームも同様に祖父からのもので、元は祖父の父のファーストネームでした。それは私にとって、マオリとして、またキリスト者として大切な意味があります。私の苗字「ピカアフ」は父方の高祖父［祖父の祖父］に由来します。字義的には「若い鷲」という意味です。それは高祖父の父が、自分の高祖父を記念して、高祖父に付けた名前でした。それは私にとって、マオリとして、またキリスト者としてかけがえのない意味を持ちます。

私のトゥプナ（祖先）はピカアフでした。彼は CMS［Church Missionary Society、英国聖公会宣教協会］の宣教師、ヘンリー・ウィリアムズ師によって、1837 年 4 月 24 日に成人洗礼を受けました。洗礼簿には、彼の洗礼名がヘンリー・ウィリアム・ピカアフと記録されています。最も興味深かったのは、彼が何人もの首長たちといっしょに洗礼を受け、その全員に新しい名前が与えられた中で、ただ一人マオリ名の英語訳ではなく、実際の英語名を与えられたということでした。そして、彼はそれに満足していたようです。きっと、彼がその名を取り、自分に代わって登録をしてくれた、その宣教師を信頼していたに違いありません。

私にとって大切なのは、彼が生涯、ワナウ（家族）、ハプ（亜族）、そしてイウィ（部族）にピカアフと呼ばれていたということです。宣教師たちにはヘンリー・ウィリアム・ピカアフと呼ばれていました。彼が末の息子（私の曽祖父）に「ヘナレ」（「ヘンリー」のマオリ語形）と名付けたところからも、そこにまったく葛藤はなかったようです。当時、彼はウィレム（ウィリアム）をファーストネームとしています。マオリの人々がヘンリー・ウィリアムズ師を呼んでいた名前です。そしてそれは、曽祖父が 1894 年に亡くなるまでその後 40 年間、教会で呼ばれていた名前です。

私にとってこれは、神へのこの新しい信仰において、彼がキリストにおけるアイデンティティを得たということなのです。彼を最初に名付けたワナウ、ハプ、そしてイウィの共同体に、彼は洗礼名で呼ばれ、尊敬されており、それが共同体の人々にとって彼が何者であるかを変えることはありませんでした。彼はマオリ（生来の共同体）とパケハ（宣教師の共同体）の二つの世界を十全に生きました。彼は二つの世界、二つの宇宙を調和させることができたのです。そしてそれは、古い世界と新しい世界、過去の現実からキリストにおける救いの未来の希望への調和です。私のワナウ名の起源の物話は、私にトゥプナとの家系によるつながりだけでなく、曽祖父に新しいアイデンティティを与えてその人生を変えた、その信仰とのつながりをも与えてくれます。私は、私のワカパパ（家系）を通して、テ・ハヒ・ミヒンガレ［聖公会の教会］によって現わされたキリスト教信仰につながれているのです。この名と共に、この同じ信仰は与えられ、そして世代から世代へと受け継がれ、キリスト者としての私の人生を変えていっているのです。

第２週 ― 第６日

「恐れるな」

ジョン・マイケル・タルボット

恐れるな、
わたしはいつもあなたの前を行く。
来て、わたしに従いなさい。
休ませてあげよう。

思い悩むな（マタイ 6:25-34）

マルコ・ティートゥス、ルーテル、エストニア

「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか。空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。なぜ、衣服のことで思い悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一

つほどにも着飾ってはいなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

リーダーシップ養成のコースに参加したときに、ある企業の幹部は次のようなことに気づきました。それは、彼の心配事の 54％は起こりそうもないことで、26％は変えることのできない過去の行動に関すること、8％は自分にはまったく問題ではないような人の意見に関することで、4％はすでに解決した個人的な健康に関すること、そしてたったの 6％が、本当に注意しなければならない問題についてだった、ということです。自分にはどうにもできないことや、まったくエネルギーの無駄であるような心配事を明らかにし、それを追いやってしまうことで、悩んでいた問題の 94％を取り除くことができました。

しかし、すべての、またはほとんどの心配事を追いやることは、精神的な技術という以上の意味があります。むしろそれは、信仰の成果であり結果なのです。服や食べ物、飲み物などの心配事について、イエスは言われます。「あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」信仰にとって大切なのは、人生がどれだけ不安定で、予測不可能で、言い争いに満ちていたとしても、世界の成り行きや私たちの人生は、最終的には神

の手のうちにあると知ることなのです。神を信じるということは、自らの強さを諦め、自分は弱く無力であることを受け入れるということです。逆説的ですが、自分の弱さを感じること以上に安心できることはありません。これは、自らの虚栄心など、説明のできない力に受けとめられてしまうほどのものなのだと知ることにつながります。この説明のできない力こそが、天におられる神以外の何者でもないと、私は経験を通して気づくようになるでしょう。

ほんの小さなものであっても、自らのうちに神と人生への信仰を見出した人間は、絶えることのない心配事によるストレスから解放されて安心を得、そして自らの現在と未来をはっきり見るようになると気づくのです。彼らの人生は日ごとにおもしろくなり、色めいていきます。自分にはどんな仕事ができるのだろうか？家族や友人と共に何をしようか？何か私を待っている新しい趣味があるだろうか？絶えることのない悩みから解放されたエネルギーと時間を手にしたとき、そして神や隣人との交わりに自らの生活を徹底的にささげるとき、これらの問いは意義の深いものになるのです。

第 2 週 ― 第 7 日

『祈祷書』聖餐式祝祷

計り知ることのできない神の平安がキリスト・イエスにあって皆さんの心と思いを守り、ますます深く父とみ子を知り、かつ愛させてくださいますように。
父と子と聖霊なる全能の神の恵みが、常に皆さんとともにありますように。アーメン

神の平和（フィリピ 4:4-9）

マーク・マクドナルド、聖公会、カナダ

主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれ

ば、平和の神はあなたがたと共におられます。

従って、私たちが土から生じたという記憶は怒りを呼び覚ますことはないでしょう。大地を分別の助けとして常に存在させ、記憶にとどめましょう。 ― 聖大バシレイオス

私たちの祖先は、生命の秩序において、また神の平和が現れるところとして、創造物の重要性を肝に銘じていました。今日、この事実を隅に置いてきた私たちは、神の与える平和が創造物と密接に関係していることに気づかねばなりません。

現代のキリスト者は、創造物からますます遠ざかっている文化の中で生きながら、平和を見いだそうともがいてきました。現代の生活の快適さは創造から私たちを遠ざける、つまり否定的な結果をもたらす有益な発展です。科学も多くのことを明らかにしていますが、しばしば創造物と私たちとの共生関係の複雑さを、科学技術に変換することによってぼやかしてしまいます。私たちが生命の細部の理解を深めるにつれて、生命のより大きな仕組みの中において、私たちに託されたあまりにも広範囲に渡る責任を効果的に認識することが、ますます困難になっているように思われます。

私たちは創造物の苦しみにストレスを感じます。結果に無頓着な経済優先の生活による被造物の汚染によって、ますます加速している苦しみにです。最近のこのストレスは持続的で、容赦ない悪天候のニュースや修復不能の損害に至る境界線を超えてしまったという感覚から起こる鈍痛のようです。

偉大なる善は、神から来る平和が創造物を含むと認識することから来るのでしょう。できる限り創造物と調和して生きるようにと神は私たちを造られた、という単純素朴な理解は、態度や振る舞いを変えることができるでしょう。私たちは、聖なる幸福な人生のために形作られたとい

うほかないのです。たとえ気候変動による損害の一部は、すでに止めるのに遅すぎるとしても、私たちの未来の平和の力は私たち人間と他の創造物との和解によって築かれることでしょう。

第３週：救いは売り物ではない

序

ソーニャ・スクープチ、ルーテル、アルゼンチン

今日、私は宝くじを買って、私の人生を変えることができるか、あるいは１日を楽しいものにできるか、試してみようとしています。

私の街に新しい教会ができました。そこの牧師たちはこう教えています。「皆さんが私たちに、私たちが求めるだけのお金をすべてくださるなら、神は皆さんを力強く祝福し、救ってくださるでしょう。」

新しいファッションブランドの宣伝は、「もしあなたが私たちの製品を買えば、あなたは常に認められ、愛され、喝采を得るでしょう」とほのめかしています。

私の国アルゼンチンには、古い格言があります。「高く買ったものを安く売るべきではない。」これは私たちの社会の論理に乗っ取っている考え方です。何かを手に入れたり、人として価値あるものと認められたり、さらには愛情や神の前での尊厳を得たりするためには、何かを犠牲にし、何かとても価値あるものを与えなければならない、と多くの人が信じています。このように考えるなら、飢餓、機会に恵まれないこと、罪や失敗、こういったものからの救いは永遠に売り物ということになります。

この週のテーマは「救いは売り物ではない」です。これは、すべてのものが売り買いされている私たちの生活の中において、とても力強い言葉です。神の言葉は広く行き渡った論理を打ち破り、私たちが神から受けているもの、すなわち神からの救いは消費できるものではないということを私たちに気づかせてくれます。皆さんは、救いを売ったり買ったりすることはできないのです。皆さんは、神の恵みによってのみ救いを

得ることができるのです。これは贈り物であって、私たちはそのお返しに何かしなければいけないということはありません。私たちがたとえそれを受けるに値しないものであっても、私たちの心に永遠に与えられるものなのです。信仰によって救われた私たちは、他人に愛を示す生き方に召し出されていくのです。

第３週 ― 第１日

聖公会の洗礼の誓約

司式者　あなたは使徒の教えと交わり、パンを裂くこと、祈ること、これらを受け継ぎますか

会衆　**神の助けによってそのように努めます**

司式者　あなたは悪を退け、罪に陥った時には悔い改めて主に帰りますか

会衆　**神の助けによってそのように努めます**

司式者　あなたは言葉と行いによって、キリストにおける神の福音を宣べ伝えますか

会衆　**神の助けによってそのように努めます**

司式者　あなたはすべての人のうちにおられるキリストを探し求めて仕え、隣人を自分のように愛しますか

会衆　**神の助けによってそのように努めます**

司式者　あなたはすべての人の間の正義と平和を求めて戦い、すべての人の尊厳を尊重しますか

会衆　**神の助けによってそのように努めます**

司式者　あなたは神の創造の完全さのために戦い、それを尊重しますか

会衆　**神の助けによってそのように努めます**

救いを買うことはできない（使徒言行録 8:17-22）

ミッツィ・J・バディ、聖公会、アメリカ

ペトロとヨハネが人々の上に手を置くと、彼らは聖霊を受けた。シモンは、使徒たちが手を置くことで、“霊”が与えられるのを見、金を持って来て、言った。「わたしが手を置けば、だれでも聖霊が受けられるように、わたしにもその力を授けてください。」すると、ペトロは言った。「この金は、お前と一緒に滅びてしまうがよい。神の賜物を金で手に入れられると思っているからだ。お前はこのことに何のかかわりもなければ、権利もない。お前の心が神の前に正しくないからだ。この悪事を悔い改め、主に祈れ。そのような心の思いでも、赦していただけるかもしれないからだ。」

救いを買うことはできません。愛と畏れ、信頼と希望のうちに神に立ち返る中で、私たちは神の無限の恵みを自分自身で経験するのです。職業、家族、経済状態、健康、そして私たちの生活すべてを神の手にゆだね、「み心が行われますように」と祈りつつ、神の意志に自分自身の意志を従わせることを求めるとき、私たちは隣人に仕えるために自由とされ、価なく与えられた神の恵みに対する喜びの応答として、惜しみなく与えるようにと導かれます。

マルティン・ルターは、「大教理問答」の中でこう言っています。「今あなたが（私は言うが）、あなたの心をつなぎ、信頼を寄せているもの、それがほんとうのあなたの神なのである。」私たち一人ひとりに対し、「どこに私の信頼を置くべきか」という問いが投げかけられています。私たちは、しばしば神をあやつり、自分の良さをもって機嫌を取り、自分の聖性によって神の心を動かそうとします。しかし、私たちの良い行いによって恵みを得ることはできません。

私たちは毎日、イスラエル人が荒野で毎朝マナを受け取ったように、必要なものすべてを神からの贈り物として日々受け取っています。1938年の堅信式での説教で、ディートリッヒ・ボンヘッファーはマナを信仰と見なしました。「私たちが神から受ける信仰は、いつも、その日に必要なだけの信仰なのです。…神のどのような賜物の場合も、それと同様です。信仰の場合だって、同じなのです。私たちがそれを日ごとに新しく受け取るか、それとも、そうでなければ、腐ってしまうか、そのいずれかです。」イエスは、私たちの人生のエマオの道を傍らで共に歩む、よみがえりの救い主です。イエスはまた、私たちの場所を備えるために先を行き、私たちの未来にすでにおられる方です。

神は洗礼において私たちを選び、キリストとの交わりを通して私たちを養い、聖書を通して私たちに語り、私たちが信仰の共同体で暮らすために必要な恵みを日々与え、聖霊を通して私たちを支えておられます。聖霊は毎日に向かい合う力を送り、必要な時にそばにいて、世界の混乱に直面した平和を与えてくださいます。救いを買うことはできません。それはすでに、キリストの死と復活という、価をつけられないほどの尊い贈り物を通して、価なしに与えられています。

第 3 週 ― 第 2 日

現代の聖公会祈祷書より、クリスマス（降誕日）特祷

全能の神よ、あなたは驚くべきみ業によりわたしたちをみかたちに似せて造られ、さらに驚くべきみ業により、み子イエス・キリストによって、その似姿を回復してくださいました。どうか、主が人性を取って、わたしたちの内に来られたように、わたしたちも主の神性にあずからせてください。
父と聖霊とともに一体であって、己を低くしてわたしたちと同じ肉体を取られたみ子、イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

神と取引できない理由（マルコ 10:35-40）

シフィソ・イヴァリンダ・シソル、聖公会、スワジランド

ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願いすることをかなえていただきたいのですが。」イエスが、「何をしてほしいのか」と言われると、二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」イエスは言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」彼らが、「できます」と言うと、イエスは言われた。「確

かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。しかし、わたしの右や左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許されるのだ。」

創世記の第1章は、神が宇宙（1～26節）と人間（27節）を創造された様子を説明しています。神は宇宙全体を所有しておられます。その中には、私たちも含まれます。私たちが自ら所有しているものなど、何一つないのです。それどころか、私たちは完全に神に頼り切っています。まるで、子どもたちが親に頼っているように。さらにヨブ1:21には、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう」とあります。ですから、神との取引は神の国では行われません。取引するとは、神が必要としておられ、所有したいと望んでいるものを、自分が持っているという前提でのことだからです。

神ご自身の似姿として創造された私たちは、霊的な存在でありつつも、肉体を持った体に宿り、死ぬべき運命にあります。私たちは神のみ言葉により頼みます。それは、私たちが霊的に高くされ、いつの日か、キリストに似たものとなるためです。アダムとエバから受け継いだ罪深い性質によって、私たちは罪人として生まれ、悔い改めを必要とします。いつの日か神に出会うためです。ローマ10:9を見ると、私たちは自分の口で、「イエスは主である」と告白する必要があることがわかります。また、私たちは自分の心で、「神はイエスを死者の中からよみがえらせた」と信じる必要があります。その時、私たちは救われるのです。「あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることのない生きた言葉によって新たに生まれたのです」（1ペトロ1:23）。これによって、私たちの霊的な成長と発展が、強固な基礎を据えられるのです。救いは大変貴重なものです。イエスはカルバリの丘にて十字架につけられたとき、その代償を負われたのですから。

神の愛は豊かで、絶え間なく、そして無条件のものです。ヨハネ3:16

にあるとおりです。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」。私たちは、神の恵みによって生きています。神の恵みは、永遠に続くのです。神は尊厳を持ち、恵み深い方です。神の国と神の義をまず求めることによってのみ、恵みは私たちに与えられるのです（マタイ 6:33）。神は、私たちが成長して、生き方の完成へと向かうことを喜びとなさいます。これらの真理に思いをめぐらせ、神の恵みを喜びましょう。キリストは、私たちのためにとりなしてくださいます。そのとりなしを通じて、いつの日か神に出会えることを、喜ぼうではありませんか。

第３週 ― 第３日

『祈祷書』陪餐後の感謝

天の父、主よ、深いあわれみによって、僕の献げた感謝賛美の祭りをお受けください。どうかみ子イエス・キリストのいさおと死によって、わたしたちと全公会の罪を赦し、またその苦しみより来るさまざまな恵みをお与えください。主よ、わたしたちは今、身も魂も正しく聖く活きた供え物として献げます。どうかこの聖餐にあずかった者すべてに、恵みと天の祝福とを満たしてください。わたしたちはまことに罪多く、それゆえに何を献げるにも足りないものですが、わたしたちのいさおを計ることなく、わたしたちの罪を赦し、この祭りをお受けくださることを、主イエス・キリストによってお願いいたします。願わくはみ子と聖霊とともに栄光は世々に限りなく、全能の父にありますように。

アーメン

あわれみ（テトス 3:4-7）

ジェニファー・レオン、ルーテル、香港

しかし、わたしたちの救い主である神の慈しみと、人間に対する愛とが現れたときに、神は、わたしたちが行った義の業によってではなく、御自分の憐れみによって、わたしたちを救ってくださいました。この救いは、聖霊によって新しく生まれさせ、新たに

造りかえる洗いを通して実現したのです。神は、わたしたちの救い主イエス・キリストを通して、この聖霊をわたしたちに豊かに注いでくださいました。こうしてわたしたちは、キリストの恵みによって義とされ、希望どおり永遠の命を受け継ぐ者とされたのです。

人を人とならしめるものは、あわれみの心です。そしてこれは、神の性質の一つでもあります。信仰によって私たちを義としてくださるのは、神のあわれみです。あわれみとは何でしょうか。それは深い共感の心と愛の表現です。神のあわれみとは何でしょうか。それは、神の恵みであり、神の愛を示す無償の賜物です。それゆえに、あわれみと愛は分けることができません。私たちは神の心によって物事を見るとき、恵みの心を育てることができるのです。

恵みについて述べている聖書の箇所の中で印象深いものの 1 つに、5 つのパンと 2 匹の魚の奇跡の話があります。「イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て、飼い主のいない羊のような有様を深く憐れみ、いろいろと教え始められた」（マルコ 6:34）。それに続き、4000 人の人々に食べ物を与えるという奇跡の中で、イエスは弟子たちを呼び集めて言われました。「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物がない」（マルコ 8:2）。そしてイエスは彼ら全員に食べ物を与えるという奇跡を起こすのです。イエスは道を見失った人、助けを必要としている人、そして飢えている人にあわれみの心を示しました。そして彼らに愛をもって、物理的な必要を満足させる食べ物だけでなく、彼らを霊的にも満たすものをお与えになったのです。人々がもう二度と、欠けを味わうことのないようにです。

私たちが助けを必要としている人や社会的に恵まれない人たちに出会ったとき、私たちは彼らを愛し、関わっていくためのあわれみの心を持って接してきたでしょうか。義を実践するのは難しいことではありま

せん。それは信仰によって義とされた生き方を示すことに他ならないのです。「しかし主は変わることなく、常にあわれみを施したもう。」

第３週 ― 第４日

「ドイツ・ミサ」特別の祈り（特祷）

マルティン・ルター

あなたに頼るすべての者の保護者であられる全能の神よ、あなたの恩恵なしには、だれもなにもできませんし、み前にふさわしくあることもできません。どうかあなたの憐みを私たちに豊かにそそぎ、私たちがあなたのみ霊によって正しい思いを与えられ、あなたのみ力によって、それを成就させてください。私たちの主、イエス・キリストによって、アーメン。

深いあわれみの心（マタイ 9:35-38）

マリアーナ・トイヴィアイネン、ルーテル、フィンランド

イエスは町や村を残らず回って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、ありとあらゆる病気や患いをいやされた。また、群衆が飼い主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた。そこで、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」

【compassion（深いあわれみの心）】名詞、他の人の不幸や悩みに対して、その苦しみを癒やしたいという思いを伴う、同情的な意識や深い共感

祈り

イエス様、あなたはご自身の存在、身体、行動、血、そして言葉をもって、私たちを深いあわれみの道へと導いてくださいました。あなたはそれを、とても特別な 2 通りの仕方で示してくださいます。

第一に、「人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさい」（ルカ 6:31）という助言によって、忍耐強く私を導いてくださいます。なんとあわれみ深い指針であり、思いやりのある最小限の戒めでしょう。あなたは私たちの限界や、人としての制約をよくご存じです。それは、私たちがしばしば自分たちの視点から、ほかの人が必要としていることをも決めつけてしまうということです。だからあなたはこの世に来て、この不完全さの中で生き、そしてその不完全さを、人に深いあわれみの心を寄せるための道具とされたのです。他の人が自分にしてくれたように、他の人にもする、ということです。

しかし、これはあなたがなさることではありません。ご自身の行動を通して、あなたは私たちにもうひとつのこと、もっと深く難しいことを教えてくださいました。イエス様、あなたは人々が自分にしてほしいことをただちにその人たちにする、などということはなさいませんでした。あなたの深いあわれみの心は、それをまったく反対にしたのです。あなたはすべての病気を治してくださいました。「あなたは私に何をしてほしいのですか」と尋ねることから始めて。

イエス様、まことの深いあわれみの心に至るこの 2 つの道を、私たちにいつも思い出させてください。第一に、「他人にしてもらうこと」がいったい何を意味しているのかを理解させてください。自らを省みることを求めさせてください。あわれみをもってあなたが共にいてくださる中で、私は自分が本当に必要としていることを見出すことができます。それは、神の国とその確かな安らぎへと私を導くものであり、中毒、傷つくような社会からの孤立や孤独に導くようなことはありません。私はあまりにしばしば、これらを混同してしまいますが。

第二に、私をさらに先へ進めてください（少しずつ）。深いあわれみに満ちた癒やしの主よ、誰かに「あなたが私にしてほしいことは何ですか」と尋ねる勇気を与えてください。よく分かっているように思えても、それを問うことを私に思い出させてください。

慈善はかなり一般的になってきましたが、連帯はまだまだです。収穫は多いが、働き手が少ないのです。深いあわれみに満ちた勇気へと私を導いてください。すべての混乱、非常識、傷つきやすさ、限界、これらを私が見、またこれらの視点から自身を見られますように。私たちの社会に、でたらめで、よくわからない、曖昧なものであっても平等を、紛らわしいものであっても癒やしをもたらしてください。深いあわれみの思いによって、私たちの共通の物語を通して互いに変えられていくようにしてください。苦しみについても、私たちは皆問題の一部でもあり解決の一部でもあるのです。私たちは罪人であると同時に聖人なのです。

混乱や、やっかいごとや、無力さのただ中で、私たちの町や村を旅し、私たちにあなたの深いあわれみを注いでください。

第３週 ― 第５日

「神はわが強きやぐら」第２節

マルティン・ルター

いかで頼むべき　わが弱きちから
我を勝たしむる　強きささえあり、
そはたれぞや　我らのため　戦いたもう
イエス・キリスト　　万軍の主なる神。

忠実な信仰（申命記 32:3-4）

マルティン・ユンゲ、ルーテル、チリ

わたしは主の御名を唱える。
御力をわたしたちの神に帰せよ。
主は岩、その御業は完全で
その道はことごとく正しい。
真実の神で偽りなく
正しくてまっすぐな方。

神があなたに新しい命を無償で贈り物としてくださっているのは、あなたが何者かとか、あなたが何をしたかとかとは関係ありません。神が神であるがゆえになさってくださっていることです。これこそ、信仰のみにより義とされるということの核になるメッセージとして、私が伝え

てきたことであり、16 世紀の宗教改革の中で神学的飛躍の表現として、神学的な考え方の中心に置かれたものです。そして、「信仰の目によってしか前を見ることができない」という人間の本質的な限界を冷静に自覚したとき、この壊れた世界に救いをもたらすという神の意志を理解することもまた、信仰の目によるしかないのです。このような考え方の中で、キリストが救いをもたらすという神の意志の中心となったことが表現され、達成されました。すべての人が生きるようになるためです。キリストにおいて、キリストによって、神の正義はまったく異なるコンテキスト（文脈）に置かれます。これは、人間の正義の理解とは深いところで反対のものだったのです。それは、何も持たない人々、共感やあわれみを求めている人々が、その信仰のゆえにいやされ、新しい命へと迎え入れられるということです。

キリストにおいて、キリストによって、「信仰」は神と、神ご自身が創造された私たち人間を含むこの世界との関係の、根本的で永遠の特徴としても認められるようになりました。

モーセが神への賛美を歌っているときに悟ったのは、この信仰です（申命記 32:3-4）。モーセは前を向き、神の約束の輪郭がだんだんはっきりと具体的なものになるのを見ると同時に、後ろを振り返って、神の約束の視点から長い旅の浮き沈みを振り返ったとき、これを悟ったのです。これまでの、またこれから現れるであろう未来をこの豊かな瞬間に置き、神を信じる者がどのように自分たちの日々の生活を理解したいと思っているかということが、意味深く描かれています。これこそが、モーセによって明らかにされた信仰の考え方なのです。これは全体を通しての主題を示しています。神は忠実な方です。これは私たちが何者か、何をしたかということは関係なく、神が神であるゆえなのです。

第３週 ― 第６日

『三十九箇条』第 11 条「人の義とされることについて」

私達が神の前で義とされるのは、ただ、私達の主であり、救主であるイエス・キリストの功績のゆえに、信仰によって義とされるのであって、私達自身の業や価値によるのではない。したがって、私達が信仰によってのみ義とされるということは最も健全な教理であって、「義認に関する説教」の中で更に広く述べられているように、慰めに満ちているものである。

信仰、希望、愛（1 テサロニケ 1:2-5）

ブライアン・ウィリアムズ、聖公会、アルゼンチン

わたしたちは、祈りの度に、あなたがたのことを思い起こして、あなたがた一同のことをいつも神に感謝しています。あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。神に愛されている兄弟たち、あなたがたが神から選ばれたことを、わたしたちは知っています。わたしたちの福音があなたがたに伝えられたのは、ただ言葉だけによらず、力と、聖霊と、強い確信とによったからです。わたしたちがあなたがたのところで、どのようにあなたがたのために働いたかは、御承知のとおりです。

不安で、おびえていて、疑い深く、心配事で頭がいっぱいになってしまい、無感動で、自分の存在は無価値だと強く感じてしまう。私たちの人生には、こんなときがあります。何かを失ったときや、病気のとき、人生の大きな変化のときなどに、このようなことが起こりがちます。しかし、特にはっきりした理由がなくても、そうなる場合もあります。

神のみ言葉は、3 つの語によってこれらの感情に応えてきました。信仰、希望、愛です。希望を見失うとき、不安と絶望が入り込んできます。信仰が砕け落ちるときには、不安のうちに、疑いや、無意味な人生を送っているという感覚が現れます。愛がばらばらに壊れるとき、不信や恐れ、そして無感動が現れるかもしれません。

デズモンド・ツツ大主教は次のように言いました。「希望とは、まったくの暗闇の中にいたとしても、光があると見ることができることである」。希望は、現実を否定しません。しかし、明日は今日よりも良い日だと考えるのです。詩編 30:6 には、それがこのように記されています。「泣きながら夜を過ごす人にも、喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。」だからこそ、かつて希望だったものが、今日は私たちの頂くものになるのです。

希望は、より良い場所に行こうとする望みです。一方で信仰は、そこにたどり着く方法を確かなものにしてくれます。信仰によって、人生には意味や方向性、そして目的が与えられます。信仰とは、神を知り、そして信じることです。人生の中で、疑いを取り除き、神に関する真実をしっかりと留めることです。信仰によって、さまざまな出来事の道筋が神によって決定されていることを、私たちは知るのです。私たちの人生に神への信仰が入ってくるとき、人生のすべての側面に新しい意味がもたらされます。

信仰によって、私たちは神の愛を体験します。愛とは、世界で最も力強いエネルギーであり、すばらしい目標を達成するよう導いてくれます。孤独を取り去り、恐れを除き、私たちを解放して、そして「私はここにいる、いてもいいのだ」という感覚を与えてくれます。愛は、私たちが

互いに関わり合うよう求めます。赦すことを可能にし、自分たちと異なる人々を受け入れる助けとなります。人間関係の中で、人々はこのように尋ねがちです。「何が手に入るだろうか」、あるいは「お返しに何をあげたらよいだろうか」と。愛は私たちに呼びかけて、私たちの目を他者へと向けさせます。そして利害を顧みず、深い共感から行動するように導きます。心を燃え立たせるためには信仰が、忍耐するためには希望が、そして物事を成し遂げるためには愛が、必要なのです。

第３週 ― 第７日

『小教理問答』朝の祝福

マルティン・ルター

天の、私の父よ、私はあなたの愛するみ子イエス・キリストによってあなたに感謝します。あなたは私をこの夜もあらゆる害と危険から守ってくださいました。また私はお願いします。どうかこの日も罪とすべての悪から守って、わたしの行いと生活のすべてがあなたのみこころにかなうようにしてください。私は私のすべて、私の体と魂とすべてをあなたのみ手のうちにお委ねしているからです。あなたの聖なる天使が私と共にいて、悪い敵が私に力を振るうことのないようにしてください、アーメン。

確信して（ローマ 8:31-39）

「ステファニー」、聖公会、オーストラリア

では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありましょうか。だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。だれが

わたしたちを罪に定めることができましょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、
屠られる羊のように見られている」

と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

中央アジアにいたとき、私は「確信の世界」に住んでいるようでした。私の友だちはひっきりなしに、「イエスは死ななかったのだ」と確信を持って私に語りました。「イエスは神の子ではない」とも。「神様の赦しは無償であって、犠牲など必要ではない」「神様の気持ちは誰にもわからないし、神様のご好意が続いているかどうかも確信はできない」等々、人々は確信を持って私を説得するのです。私がクリスチャンでいられる余地など、どこにあったというのでしょう？

中央アジアに行って間もなく、私は恐ろしい経験をしました。ある夜の午前２時に、私は突然目覚めました。世界が急に焦点を結び、真理がわかったように感じました。「キリスト教は全部嘘だ。単なる伝統に過ぎない。真理ではない」。もちろん、誰かが私にはっきりとそう言ったわけではありませんでした。しかし、イスラム教の環境に完全にどっぷりと浸かっていたので、私の中には、イスラム教がいろいろな形で染み

込んでいたのです。そのとき、私は世界がばらばらになっていくように感じました。イエスを信じたいと必死で願いましたが、私はもう、嘘の片棒を担ぎ続けることはできなかったのです。私に約束された確信など、どこにあったというのでしょう？

虚しさの中で、私はある牧師のことを思い出しました。あるとき、その牧師はこのように言ったことがありました。「キリスト教の信仰のすべては、第 1 コリントの 15 章にかかっている。もしもキリストがよみがえらなかったのならば、私たちの説教も信仰も無意味だ」。そこで私は「コリントの信徒への手紙一」の第 15 章を開き、復活の証拠や弁護を求めて、何度も何度も読み返しました。神のご加護のおかげで、インターネットはつながっていました。信仰の友がスカイプ［インターネット電話］を通じて、復活について話し、いっしょに祈ってくれました。次第に暗闇は退いていき、私は再び眠りにつきました。

次の朝目覚めて、私はその出来事の意味を知りました。「霊的な攻撃」でした。私は、心の底からほっとしました。そして、「神様のおかげで、私はそれを乗り越えたのだ」と思いました。また、私が自分の信仰をなくしてしまったときに、神が寄り添ってくださっていたことへの感謝が共にありました。本当に、私たちの主イエス・キリストの愛から、どのような力も私たちを引き離すことはできないのです。私は、そう確信させられたのです！

第４週：人間は売り物ではない

序

ダルシー・ドラミニ、聖公会、スワジランド

神が世界を創造されたとき、神は言われました。「我々にかたどり、我々に似せて、人間を造ろう。」神は、男と女とに人間を創造されました。人間は、三位一体の神の似姿として創造されました。つまりすべての人間は、商品としてではなく、共同体となるために造られたのです。ヨハネ 10:10 はこう宣言します。「私が来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである」。初めから、神は「人の豊かな命」という夢を持っていました。

豊かな命は、神様がすべての人間にくださった、無償の贈り物です。性差や人種、肌の色や性的指向は問われません。それゆえ、互いに愛や尊敬を持って接し合うようにと、人間は命じられているのです。すべての人間に対して、正義が示されるべきです。それぞれの状況は問われません。HIV／エイズと生きている人も、精神・知的・身体障がいのある人も、アルビノ［先天的なメラニン色素欠損］の人も、その他の困難な状況にある人も。すべての人の尊厳が、大事に扱われるべきなのです。したがって、人間は売り物ではないのです。人間は決して、売り買いされる商品として扱われてはならないのです。

神は女性と男性を造り、愛する力と、平和と正義をもたらす力を与えられました。ですから、私たちは、すべてのものに豊かな命をもたらす使者として、呼び出されているのです。たとえ富んでいても貧しくても、北半球に住んでいても南半球に住んでいても、すべての人は世界を変えていく使者となる義務があります。それは、すべての人々が命を受けるため、しかも豊かに受けるためなのです。

第４週 ― 第１日

『三十九箇条』第 17 条「予定と選びについて」

（永遠の）生命への予定は神の永遠の目的である。これによって（世界の基がすえられる以前から）神が人類の中からキリストのうちに選ばれた者達を呪いと刑罰から解放し、彼らを栄光に帰せられるべき器として、キリストによって永遠の救いに入れることを私達には隠されている御計画によって絶えず決定していたもうのである。したがって、神の素晴らしい恩恵を与えられている人びとは、神の目的に従って、時宜に応じて働きたもう聖霊によって召されるのである。彼らは恩恵によって召命に従い、値いなしで義とされ、養子として神の子とされ、ひとりの御子イエス・キリストの像に似る者とされ、敬虔に善い業のうちに歩み、ついに神の慈悲によって永遠の浄福に至る。

予定について、またキリストにある選びについて敬虔な想いを寄せることは、敬虔な人びとにとって快く楽しい、言葉で言い表わし難い慰めである。またこのような人びとは、肉と地上の肢体の働きを殺し、彼らの心を高い天上の事柄にまで引き上げて下さるキリストの御霊の働きを感得する。なぜなら、そのような敬虔な想いは、キリストによって与えられる永遠の救いの信仰を確立し、また強固にすると共に、神への愛を一層燃え立たせてくれるからである。そこで、キリストの御霊を持たないせんさく好きの肉欲的な人びとにとって、神の予定の宣告を絶えず眼の

あたりにすることは最も危険な落し穴であって、それによって悪魔が彼らを絶望の中におとし入れるか、あるいは絶望に劣らず危険極まりない最も汚らしい悲惨な生活の中に突き落すことになる。

更に私達は、聖書の中で一般的に示されているような仕方で、神の約束を受け容れなければならない。また、神の御言によって私達は明白に宣言された神の意志が、私達の行ないを通してあとづけられるはずである。

人類と神の像（詩編 8:4-10）

タミシャ・ワトソン、ルーテル、ガイアナ

あなたの天を、あなたの指の業を
　　わたしは仰ぎます。
月も、星も、あなたが配置なさったもの。
そのあなたが御心に留めてくださるとは
　　人間は何ものなのでしょう。
人の子は何ものなのでしょう
　　あなたが顧みてくださるとは。
神に僅かに劣るものとして人を造り
なお、栄光と威光を冠としていただかせ
御手によって造られたものをすべて治めるように
　　その足もとに置かれました。
羊も牛も、野の獣も
空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。
主よ、わたしたちの主よ

あなたの御名は、いかに力強く
全地に満ちていることでしょう。

これは矛盾であり、不可解なことです。私たちが、罪に絡まっているのに、正しく振る舞うべきだと信じていること。力によってあまりに堕落しているのに、他の生物より優位に立っていること。神よりもずっと劣っているのに、尊いものと神に呼ばれていること。傷つきやすく壊れやすいものなのに、神の目には値高く、大切にされていること。私たちはすばらしい者として造られ、罪に汚れ、完全なる神に愛され、神の子によって贖われました。

「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして…支配させよう。』…」（創世記 1:26）。私たち人類は、「神の似姿」として、恐ろしいほどにすばらしく造られたのです。

創造力豊かで、知的で、美に敏感で、高潔で、他者と関わり、愛に満ち、霊に満たされている。私たちはこういった性質を持つものとして造られました。似せて造られたもの（像）というのは、原型を反映しています。像というのは、かすんでいたり、ゆがんでいたりすることもありますが、それ自体では存在し得ません。同じく、私たちは自分自身のみで存在することはできません。私たちが存在するには、原型、すなわち神が必要なのです。それなのに、この原型は脇に置かれ続けています。神の完全な姿ではなく、この世で追い求めているものや消費しているものを、私たちは反映しているのです。

創造力を欠き、知性を欠き、醜く、不品行で、互いに切り離され、憎しみに満ち、神を見失っている。このような風潮が驚くほどに広がっています。人間らしさは、どこに行ってしまったのでしょうか。私たちは、神の真の姿を反映しているでしょうか。私たちは、理性的で、倫理的に振る舞い、あわれみに満ち、神に飢え乾いている人間でしょうか。自分の魂の鏡をのぞいたら、そこに真に映し出されるのは何でしょうか。

こういうわけで、神は、完全な似姿であるイエス・キリストを私たち

のところへ送られたのです。神のみが存在していた頃の最初の像を、私たちに思い出させるために。私たちはこれによって、自分が本当は何者なのかということばかりでなく、自分が誰のものであり、そして神はどんな方なのかを理解するのです。

神は、愛あふれる恵みのみ腕を私たちに伸ばし、かつてのような（そして永遠にそうである）関係にと、私たちを招いているのです。神と人類の完全な共存。初めのように。アーメン。

第４週 ― 第２日

ヒッポの聖アウグスティヌス『告白』に基づく祈り

全能の神よ、
あなたはわたしたちを、ご自身に向けて造られました。
あなたのうちに憩うまでは、わたしたちの心は安らぎを得ません。
この世にあってはあなたの栄光に向かって生き、
のちの世では永遠にあなたを喜びとするように、
あなたの霊でわたしたちを導いてください。
父と聖霊とともに生きておられる、世々にひとりの神、
わたしたちの主、イエス・キリストによって。
アーメン

人間と神の似姿（創世記 1:26-27）

ジョサイア・イドゥーフェアロン、聖公会、ナイジェリア

神は言われた。
「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」
神は御自分にかたどって人を創造された。
神にかたどって創造された。
男と女に創造された。

1517 年［ルターによる宗教改革の開始年］直前には、多様なヨーロッパの民族が共通の信仰で結ばれていました。そして、圧倒的多数は西方カトリック教会に属していました。中世後期のヨーロッパにおけるキリスト教徒は、イスラム教徒への恐れを共有していました。15 世紀半ばにオスマン帝国が東ヨーロッパに勢力を拡大してからは、特にそうでした。西方教会における急速な内部分裂によって生まれた懸念は、実際的なものでした。イスラム教に向かい合う、キリスト教ヨーロッパの側の結束を弱くするということです。今日の私たちも、アメリカ、ヨーロッパ、そしてアフリカにおいて、同じような恐れについて見聞することがよくあります。私の国ナイジェリアでも、イスラム教とキリスト教との間の緊張関係は、日常的な現実です。

1517 年と 2017 年との間にある大きな違いの一つは、キリスト教と他の偉大な世界諸宗教との間で、実りある宗教間対話が行われてきた近年の歴史です。ユダヤ教、仏教、ヒンズー教、土着の伝統諸宗教、そしてもちろんイスラム教が、対話の相手となりました。このような対話に勢いをつけたのは、相互理解や協働、共通する聖性の基盤の発見、そして平和の構築でした。神学的な基礎となったのは「創世記」における神の言葉でした。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」（創世記 1:26）。私は聖公会に属しており、宗教間対話に関わっています。私は自分自身でイスラム教に接して、『コーラン』は人間の創造という点において、聖書ととても近い内容であることを発見しました。そしてイスラム教徒とキリスト教徒は、自分たちに共通する人間性、「神の似姿として創造された」ことを、お互いに承認しあうことができると思いました。『コーラン』では、人間性が一つであることと、人間が共同体の中で多様であることとが、共に承認されています。多様性は、神様からの贈り物です。神は私たちを、共通の人間性を持つものとして、また国籍・言語・民族、そして宗教すらも異にするものとして、創造されました。それは、私たちがお互いを理解しあうためでした。

「おお、人々よ、われらは、おまえたちを男女に分けて創造した。おまえたちを種族と部族に分けておいたが、これは、おまえたちがたがいに知りあうためである。」（『コーラン』49:13）

すべての人間は、神の像、神の似姿として創造されました。したがって、聖書は次のように主張しています。「売り買いされる人間などいない。人身売買などあってはならない。すべての難民は尊厳を持ち、保護を受け、歓迎されるべきだ。人種差別、外国人嫌悪、そして宗教的不寛容は、神が人間を創造された、その計画の正反対だ」。16 世紀の西欧のキリスト教徒たちにとって、自分たち自身の時代においては、このような姿勢を取ることは難しかったかもしれません。しかし、教会生活において、あらゆる改革や刷新の動きが肯定するものの中心には、この姿勢があるのです。

第４週 ― 第３日

「こころこめて」（1636）

マルティン・リンカート

こころこめて　　み名をたたえよ、
そのみわざは　　いとも妙なり。
母のうでに　　在りし日より
ふかき恵み　　ゆたかにあり。

主はこの世を　　統べ治めたもう、
よろずのもの　　ただ主にたよる。
み使いらは　　琴をならし
主のみ栄え　　たたえうたう。

主はゆたかに　　糧をあたえて
父のごとく　　みちびきたもう。
雨をそそぎ　　地をうるおし
あふるる愛　　われをかこむ。

恵みふかき　　主をほめまつらん。
すべての民　　み名をたたえよ。
仇は失せて　　うれいはなし、
主の恵みを　　いまよろこべ。

価値と、人間の尊厳（詩編 139:1-14）

アンゲリカ・ホフマン、ルーテル、ドイツ

主よ、あなたはわたしを究め
わたしを知っておられる。
座るのも立つのも知り
遠くからわたしの計らいを悟っておられる。
歩くのも伏すのも見分け
わたしの道にことごとく通じておられる。
わたしの舌がまだひと言も語らぬさきに
主よ、あなたはすべてを知っておられる。
前からも後ろからもわたしを囲み
御手をわたしの上に置いていてくださる。
その驚くべき知識はわたしを超え
あまりにも高くて到達できない。

どこに行けば、あなたの霊から離れることができよう。
どこに逃れれば、御顔を避けることができよう。
天に登ろうとも、あなたはそこにいまし
陰府に身を横たえようとも、見よ、あなたはそこにいます。
曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも
あなたはそこにもいまし
御手をもってわたしを導き
右の御手をもってわたしをとらえてくださる。

わたしは言う。
「闇の中でも主はわたしを見ておられる。
夜も光がわたしを照らし出す。」

闇もあなたに比べれば闇とは言えない。
夜も昼も共に光を放ち
闇も、光も、変わるところがない。

あなたは、わたしの内臓を造り
母の胎内にわたしを組み立ててくださった。
わたしはあなたに感謝をささげる。
わたしは恐ろしい力によって
**　　驚くべきものに造り上げられている。**
御業がどんなに驚くべきものか
**　　わたしの魂はよく知っている。**

人間の尊厳とは、決して奪うことができないものです。神と人間との関係と同じく、永遠に終わることがありません。人間の尊厳と価値は、神からの無条件の賜物であり、人生のどの段階にある人にも備わっているものなのです。人間の尊厳は、神との関係の実であり、地上の限りある命を超えたものです。まさにこの詩編にあるとおり、「陰府に身を横たえようとも、…曙の翼を駆って海のかなたに行き着こうとも」、神はそこにおられるのです。

すばらしいものとして神に造られた、ということは、何にも増して、私たちが大切にされているということなのです。とりわけ、あなたが海のかなたにいるとき、人生の終末にあるとき、弱ってきて、家族や隣人、介護スタッフの手を借りなければならないことが増えているときに。あなたは、何にも増して大切にされているのです。とりわけ、落ち込んでいるとき、うつ病のさなかで陰府に床を設けているとき、終末期の病気で病院のベッドに横たわっているときに。あなたは、何にも増して大切にされているのです。とりわけ、人生の初めにも、終わりにも。強いときにも、弱いときにも。遊んでいるときにも、忙しく働いているときにも。何かが自分でできないときにも、できるときにも。神はいつもそこ

におられるのです。

神がいつもそこにいて、自分の話す一語一句、自分の考えのすべて、自分の感情のすべてを知っておられると考え、そのような神を知り、感じることを恐れる人もいるでしょう。マルティン・ルターも、若い頃はそのような人でした。神は容赦なく厳しい方で、理解するよりも裁く方だと、昼も夜も恐れていたのです。そんな不幸な日々を積み重ね、恐れと心配に苛まれていた中で、ヤコブがヤボク川の川岸で神と闘ったように、マルティン・ルターは神と格闘しました。しかし、彼の信仰の先輩と同じく、ルターにとってもその格闘は祝福となったのでした。聖書解釈を徹底的に深め、神から逃げ出したり戻ったりしながらも、ルターはついに理解したのです。神は、一人ひとりの人間をすばらしく造られ、一人ひとりの魂に尊厳と価値を与えられたということを。その価値と尊厳は、決して失われるものではなく、むしろあなたが神の愛を感じ始めたときに見出されるものです。人間の尊厳とは、決して奪うことができないものです。それは、あなたは神を至るところに見つけることができ、また神もあなたがどこにいても探し出されるからです。

第４週 ― 第４日

「善い行いについて」（1520）

マルティン・ルター

私たちは第一に真理もしくは正義が、暴力や危急にさらされるような時には、あらゆる不正に対して抵抗しなければならない。そしてその場合、ある人々のように、人物により差別を設けてはならない。彼らは、金持ちとか権力家の友人たちに加えられた不正に対しては、いとも熱心勤勉に戦うけれども、それが貧者とか卑賤な者、あるいは自分の敵に加えられた場合には、鳴りをひそめてまことに辛抱づよい。これらの連中は、神の御名と栄光とをあるがままには見ずに、色ガラスをとおして見、真理もしくは義を、人物に従って測るのである。しかも、事柄よりも人物を重視する自己の不実な目には、気づかない。これこそ偽善者の親玉である。ただうわべだけ、真理を守っているかのように見せかけているにすぎない。なぜならば、彼らは、金持ちや権力家や学者や友人たちの味方になっていれば、危険が身に及ぶ心配もなく、自分の方も彼らから保護や尊敬を受けて得をすることをよく承知しているからである。

文化や人種を超えた価値（詩編 67）

アンジェラ・オロトゥ、ルーテル、タンザニア

神がわたしたちを憐れみ、祝福し
御顔の輝きを
　　わたしたちに向けてくださいますように
あなたの道をこの地が知り
御救いをすべての民が知るために。

　　神よ、すべての民が
　　あなたに感謝をささげますように。
　　すべての民が、こぞって
　　あなたに感謝をささげますように。

諸国の民が喜び祝い、喜び歌いますように
あなたがすべての民を公平に裁き
この地において諸国の民を導かれることを。

　　神よ、すべての民が
　　あなたに感謝をささげますように。
　　すべての民が、こぞって
　　あなたに感謝をささげますように。

大地は作物を実らせました。
神、わたしたちの神が
　　わたしたちを祝福してくださいますように。
神がわたしたちを祝福してくださいますように。
地の果てに至るまで
　　すべてのものが神を畏れ敬いますように。

この詩編の主題は、祝福、救い、あわれみについてです。神は、これらをすべての人にお与えになり、文化、性別、人種、年齢、社会的地位、経済状態を問われませんでした。神は、私たちにとって良いもの、それも最良のものを与えることを望み、その力を持っておられます。

神の祝福とあわれみは、すべての人に及ぶのです。正しい者にも、正しくない者にも。信じる者にも、信じない者にも。「善人」にも、「悪人」にも。神の目には、すべての人は同じに映るのです。マタイ 5:45 に、次のようにあるとおりです。「あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」

この詩編の作者は、全世界について語っています。特定の民族、信条、性別、性的傾向、年齢の人だけを選んだり、あるいは、神を賛美する能力や、神の配慮・愛・祝福に応答する能力を持つ人に偏ったりはしていません。神は、私たちの理解・期待・望みを超えて、働き、祝福し、愛し、気を配り、統治されるのです。

人間は聖なるものであり、神の前に平等であると考えられています。なぜなら、私たちは神の民であり、神の似姿に造られたものだからです。私たちには、生まれながらの計り知れない価値と尊厳があります。人のうちにある神の像は、時にぼやけてしまうことがありますが、人類はその歴史の中で、必ず、自らのうちにある神の像を再生させてきたのです。奴隷貿易やアパルトヘイトの終焉のために払われた努力が、この例です。

一人ひとりの人に、大きな価値があります。どの人にも、尊厳・正義・平和・自由を求める権利があるのです。それゆえ、私たちは平等な人間同士として、互いに尊敬し合い、愛し合い、尊重し合うことで、「平等という価値体系」を認め、実践しなければなりません。

第４週 ― 第５日

主教 ティモシー・ダドリー・スミスによる聖歌（1962）

伝えよ 偉大な主を　　数知れない 恵みを
主の言葉は優しく　　わが心は喜ぶ

伝えよ 主のみ力　　その偉大な み業を
主の憐れみはいつも　　畏れ敬う人に

伝えよ 主の支配を　　その み腕の力を
高ぶるものを下ろし　　飢えた人 満たされる

伝えよ 主の約束　　み言葉の栄光を
憐れみを忘れずに　　神の民を助ける

年齢や性別を超えた価値（マルコ 10:13-16）

レベッカ・サンギータ、ルーテル、インド

イエスに触れていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でな

ければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子供たちを抱き上げ、手を置いて祝福された。

「黙っていなさい。」

私の住む世界では、多くの女性や子どもたちが、こう言われながら育ちます。はっきり、大きな声で、つまりは「お前たちの声には、価値がない。お前たちの意見など、どうでもいい」、こういう意味を込めて発せられます。女性や子どもは、（家族の中であれば）慣習の名のもとに、（教会の中であれば）伝統の名のもとに、そして、（虐待にあえば）不名誉の名のもとに、黙っているように言われます。発言するということは、価値があることを示すもので、大半の女性や子どもはそこから締め出されているのです。

私の好きな聖書箇所のひとつは、列王記下 5 章でナアマンが癒される場面です。ここでは、名もない外国人の捕虜である少女の言葉が、ナアマンの重い皮膚病を治します。時々私は、ここで少女が黙るように命じられていたらどうなっていただろうと思うことがあります。ナアマンの妻やナアマンが、少女の言葉をまともに捉えていなかったら？少女が奴隷の仕事以上の口出しをしないよう、命じられていたら？ナアマンの癒やしの物語は、子どもの言葉ひとつが、人に豊かさをもたらし得ることを示しています。

もし、彼女の周りにイエスの弟子たちのような人々がいて、彼女を黙らせていたらどうなっていただろうと考えずにはいられません。イエスの弟子たちは厳格で、社会の底辺にいる人々―子ども（マルコ 13-14）、カナンの女（マタイ 15:23）、盲目のバルティマイ（マルコ 10:48）―がイエスに近づかないようにしています。しかし、イエスの態度は違います。イエスは、「妨げてはならない」（マルコ 10:14）と言うのです。

イエスは、弟子たちに挑戦します。心を入れ替えて子どものようにならなければ、決して天の国に入ることはできない（マタイ 18:3）。これは、力を特別に持っている者たちへの、力を放棄するようにという挑戦

です。「価値」が性別や年齢と紐つけられることの多い中で、「先の者が後になり、後の者が先になる」という神の国の規範こそ、既存の不平等を正すために重要なのです。それゆえ、年齢や性別を超える価値を認めることができるようになるためには、イエスの弟子として自分を空にすることが求められます。そうすることで、一部の人だけでなく、すべての人の人生が満たされ、豊かなものになるのです。

第４週 ― 第６日

『祈祷書』顕現後第５主日特祷

神よ、主の家族である教会を導き、まことの教えを保たせてください。一心に天の恵みを望む者を、み力をもって常にお守りください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

障がいと神の恵みの担い手：ジョンの賜物（2 コリント 12:9-10）

ティモシー·J ＆ フィオナ·ハリス、聖公会、オーストラリア

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

私たちの息子ジョンは、31 歳になります。精神年齢は５歳児のため、ときに不安になることもあり、一般社会のペースについていくことを困難に感じます。息子は神からの贈り物であり、神の恵みのすばらしい担い手です。

ジョンは、この世でまれに見るほど、愛や友情を表現することができ

るという長所を持っています。でもこれができるのは彼だけではありません。障がいを持つ人々で、このような長所を持っている人は少なくないからです。そういう人たちは、ほかの人が何かを達成することを嬉しいと感じ、友だちの小さな成功を共に喜ぶことができます。

ジョンには葛藤もあり、ときにくたびれ果ててしまうこともあります。彼は天使ではないのです。それでも彼には深い信仰があり、すばらしい祈りの生活があり、聖書を愛し（読むことはできませんが）、イエス様は夢の中で彼に語りかけます。

ジョンにとっての大きな喜びの一つは、私たちの教会で交わされる平和の挨拶です。教会の中を歩き、見落とされてしまいがちな人たちを見つけ出します。彼にハグしてもらえる瞬間は、とても豊かに感じられます。

ジョンはジョンです。いろんな意味で、そう受け入れるしかないのです。もちろん私たちは、彼がより自由に、あまり不安を感じることなく、他者のペースに合わせて生きていけたらと願うこともあります。それでも、ジョンを通して与えられた神からの贈り物は、私たちに人の美しさの深みを見せてくれますし、恵みのかけがえのない担い手として私たちに与えられた存在です。人の価値体系というのは、他者との比較によって形成される表面的なものです。私たちは、ジョンが私たちの人生の中にいてくれることを愛しており、彼の人生の中にある、そして彼の人生を通して示される神の恵みによって、祝福されています。

第４週 ― 第７日

『祈祷書』代祷の結び

主よ、変わることのないみ恵みによってわたしたちに先立ち、絶えることのないみ助けによってわたしたちを伴い、何事をするにも初めから終わりまで常に主に頼り、み名の栄光を現し、ついに永遠の命に至ることができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

神の子とされる：「行い」に先立つ「存在」（ガラテヤ 4:1-7）

マティアス・C・デア、聖公会、香港

つまり、こういうことです。相続人は、未成年である間は、全財産の所有者であっても僕と何ら変わるところがなく、父親が定めた期日までは後見人や管理人の監督の下にいます。同様にわたしたちも、未成年であったときは、世を支配する諸霊に奴隷として仕えていました。しかし、時が満ちると、神は、その御子を女から、しかも律法の下に生まれた者としてお遣わしになりました。それは、律法の支配下にある者を贖い出して、わたしたちを神の子となさるためでした。あなたがたが子であることは、神が、「アッバ、父よ」と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。ですから、あなたはもはや奴

隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです。

私たちは、存在することにより人間（human beings）なのでしょうか。それとも、何かを行うから人間（human doings）なのでしょうか。私が住んでいる香港のような競争社会では、人が人として「存在する」というよりも、何かを「行う」存在になってしまっているように感じられます。企業は、従業員の価値を彼らの生産性のみに基づいて評価します。3 歳の子どもたちが、複数の言語を習得するため、また社会適応力や学習能力を身につけて幼稚園受験の面接に備えるため、いくつものクラスに出席させられています。2016 年の 8 か月間に、30 人近い高校生と大学生が、人生のプレッシャーに耐えられなくなり、自殺を図りました。私たちは、存在することにより人間なのでしょうか、それとも何かを行うから人間なのでしょうか。私たちは、富や成功を得るために機械のような存在となり、自らの人間性をも売り渡してしまったのでしょうか。

この世における歩みの中で、私たちが授かっている最良の賜物の一つは、私たちはイエス・キリストへの信仰を通して、神の娘や息子とされているということです。私たちは単に、神の似姿に創造された、また神に愛されているというだけではありません。神にとって、かけがえのない子として存在しているのです。神を「アッバ、父よ」（ガラテヤ 4:6）と呼ぶことができるのは、なんと尊いことでしょう。私たちは、私たち一人ひとりに、そして私たちが出会う人々に与えられた、この聖なるアイデンティティを忘れがちです。私たちの価値は、私たちが何を生産したか、またどれだけの収入を得て、どれだけの影響力を持つか、どんな「包装」に自分がくるまっているか、などによるものではありません。本当の価値は、私たちは神のものであり、キリストに愛され、その血によって贖われた存在であるという純然たる事実から来るものです。これを通して、私たちは愛、感謝、希望、平安を持って生きていくことができます。私たちを傷つけた人々を赦し、隅に追いやられた人々を心にか

け、見知らぬ人に笑顔で接することができるようにもなります。私たちが何かを行う前に、まず忘れないでいてほしい最も重要なことは、私たちは存在することにより人間なのであり、愛されている存在であり、神の霊に満たされた存在だということです。キリストのみ前に進み出て、心を開きましょう。キリストの教えに従い、キリストと共に歩んでいきましょう。そのとき私たちは自由になることができ、愛して生きることができるのです。

第 5 週：創造は売り物ではない

序

ニコラス・H・F・タイ、ルーテル、香港

創造の最も初めの時から今日に至るまで、人間は神が創造された世界を搾取してきました。それはまるで、形のない虚無と暗闇(*tōhû wābōhû*)の深いふちを下っていくかのような行いでした。今日の地球環境の悪化は人間の貪欲さの結果であり、地球温暖化や世界の荒廃は、私たちの底なしの消費によってますます加速しています。これは、神が創造された世界に関して、聖書が命じたことを人間が果たした結果にほかならない、と主張する人もいます。例えば、創世記 1:26-28 には、神は自然を「従わせ」て「支配する」ために人間を創造されたと記されています。私たちは、この「従わせ、支配する」という王としての概念を理解するにあたって、人間が地球環境を搾取することは必然であるとか、あるいはそういった搾取的行いが聖書に基づいていると考えてきたのかもしれません。しかしそのような考え方は、聖書の意図的な誤解釈によるものであり、そして神が人間に与えてくださった役割に対する誤った理解によるものなのです。

人間の実際の役割は、王による支配の聖書的概念に基づいて、自然を「従わせ、支配する」ことです。ですから私たちは、聖書における王の力と権威は、無制限なものではないということを心に留めておかなければなりません。理想的なイスラエルの王たちは、神の律法に従って国を治めたのでした。それは王が神の裁きと義をもって統治するということであり（詩編 72:1）、そうすれば創造された世界全体が祝福されるということでもあります（詩編 72:6）。その結果として、王は責任を持って国を治めることができ、神の創造物の管理者として、神に対する責任を

引き受ける者となるのです。「従わせ、支配する」という聖書の命令をこのように理解するならば、人間は決してこの被造世界を搾取するべきではありません。そうではなく、神の目に良いとされる状態を守ることこそが、人間の務めなのです。

近年のパリ協定や、パリ気候変動会議の成功による明るい兆しの一方でなお、地球環境の未来については悲観的な見通しに留まらざるを得ません。会議での決定を実行し、二酸化炭素の排出を実際に削減しようとするそれぞれの国の意思は、あまりに薄く、あまりに遅れているのではないでしょうか。例えば、アメリカ合衆国は京都議定書に署名はしましたが、批准しませんでした。2009 年のコペンハーゲン合意に関してはあまり進歩が見られず、むしろ見通しをさらに悲観的にしただけでした。しかしながら、神の民として、キリストと、今も続く聖霊の働きとを信じる信仰をもって、私たちと自然環境の関わりに対して深く配慮しなければなりません。だからこそ、これからも私たちは、あらゆる形での自然の搾取に反対し、自然を単なる売り物であるかのように扱う試みに反対していくのです。そのようにして私たちは、地球という神からの良い贈り物を、保全し管理することに務めていきたいと思うのです。

第 5 週 ― 第 1 日

アイザック・ワッツによる賛美歌（1719）

過ぎにし代々にも　神はたすけ
ときわのかくれが　かたき望み。

みくらのもとにぞ　やすきありて
み民のまもりは　いともつよし。

世界のはじめの　そのさきより
み神はときわに　変わりまさず。

ちとせもみまえに　とく過ぎゆき
短きひと夜の　ゆめのごとし。

あしたに消えゆく　夢のごとく
時代は過ぎ去り　ひとは失せぬ。

創造とシャローム（平和）（詩編 85:8-14）

テッティ･サブリナ･ロトゥア･タンブナン、ルーテル、インドネシア

主よ、慈しみをわたしたちに示し
わたしたちをお救いください。
わたしは神が宣言なさるのを聞きます。
主は平和を宣言されます

御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に
彼らが愚かなふるまいに戻らないように。
主を畏れる人に救いは近く
栄光はわたしたちの地にとどまるでしょう。
慈しみとまことは出会い
正義と平和は口づけし
まことは地から萌えいで
正義は天から注がれます。
主は必ず良いものをお与えになり
わたしたちの地は実りをもたらします。
正義は御前を行き
主の進まれる道を備えます。

人生は過去から現在へ、そして未来へと流れます。人間の記憶というのは重要ですが、しかし私たちはそのもろさも、同時に心得ています。私たちの現在と未来とは、私たちが過去の出来事をどう記憶しているかということに影響を受けているのです。個人のものであれ共同体のものであれ、過去の苦い経験によって、私たちは現在にも未来にも、より慎重に人生を送るようになることもあります。

神との永遠の記憶は違います。神は過去であり、現在であり、未来である方だからです。詩編第 85 編において、この詩編の作者は、過去に起こった神の恵みの出来事を思い起こして、現在におけるその回復と平和（シャローム）を求めます。そして、未来における神の約束の成就をも求めるのです。この作者がどう生きたかについて、詳しいことはわかりませんが、理想的な人生でなかったことは確かでしょう。しかしそれでも、作者は未来に目を向け、神のシャロームが宣言されることを信じているのです（詩編 85:9-14）。

困難のただ中にあって、作者は宣言します。神は私たちにシャローム

を賜り、それによって現在を生きる強さを与え、栄光ある未来を約束してくださっていると。神のシャロームは敵からの安全のみを意味するのではなく、正義と人々の幸福をも意味しているのです。シャロームとは、ヘブライ語で平和、調和、無欠、完全、繁栄、幸福、平安を現す言葉です。シャロームが意味するのは、戦争や争いがないことだけではありません。欠けのないことや、健全であることをも意味するのです。

詩編 85:10 では、神の救いは、神の慈しみ（ケーシェド）とまこと（エメス）の出会いとして描かれています。ヘブライ語のケーシェドという言葉は恵み、優しさ、親しみ、あわれみといった要素を含んでおり、エメスという言葉は持続可能性、正しさ、信頼性、予測可能性、安定性といった意味を内包しています。神の恵みと神の良さは、イスラエルの過去の過ちにかかわらず、神がイスラエルと継続した関係を持たれていることの中に現わされています。神はイスラエルに、そしてあなたと私に、正義と平和を宣言されているのです。

クリスチャンにとっての神の良さの記憶は、キリストの十字架の出来事に根ざしています。キリストの十字架において慈しみとまことは出会い、正義と平和は口づけするのです。現在における神の愛と、過去における神の誠実さを憶えることは、世々にわたって神の民のシャロームとして経験することができる約束となります。そうであるからこそ、勇気を持って未来に向かって行くことができるのです。

第５週 ― 第２日

フォリオット・サンドフォード・ピアポイントによる聖歌（1854）

美しき地と　　輝く空と
われらをめぐる　深き恵みを
与えたまえる　　神をぞたとう

大地に育つ　　草木も花も
広き宇宙も　　めぐる時をも
与えたまえる　　神をぞたとう

召されし友も　　世にある友も
祈りのうちに　　出会う喜び
与えたまえる　　神をぞたとう

贖い主の　　聖なる糧を
あまねく人と　　分かつ恵みを
与えたまえる　　神をぞたとう

命を尽くし　　われらのために
愛と平和の　　全き賜物
与えたまえる　　神をぞたとう

被造物の管理者として（創世記 1:28-31）

パトリシア・レントン、聖公会、アルゼンチン／イギリス

神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」

神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」

そのようになった。神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

創造物について、悔い改めという行為は受け入れられません。懺悔することによって、絶滅種が戻ってくるわけではなく、言葉で謝っただけで、森林破壊の跡地に緑は戻ってきません。人間の罪をただ認めるという以上の行いが求められています。私たちは徹底的に自分たちの行いを変え、過去の誤りを根本から覆し、より強い責任感を持って被造物の管理者とならねばなりません。人類すべてが、信仰を超えて、愛に満ちた創造主である神に根ざした、より本質的な意味での被造物の管理者となり、被造物に心を配り、被造物への責任を認識しなければなりません。徹底的かつ責任的な管理者であることが求められます。理解が人間の欲を超えるところに命があります。自己中心的な考え方が協力によって克服されるところに、創造的な奉仕の業が起こります。

創造は売り物ではありません。それは、壁に掛けられている狩猟の戦利品のようなものでもありません。私たちにとって今は、神に喜ばれる道を歩む時であり、神が創造されたものを傷つけないようにするために、

破壊の流れを覆す時、自らの利益のみを追求する者たちが創造物を過剰かつ不適切に使用した結果生み出された不平等に目を開いていく時です。

私たちは、富や名誉や評価といったものを、墓に持っていくことはできません。それらは、必ず置いていくことになります。私たちは自らの無関心な態度を改めることで、生物種がこれ以上絶滅させられないようにしなければなりません。また、人々、文化、文明、そして神の創造物のいかなる部分もこれ以上滅びることがないように、生き方を変えなければなりません。創造は、売り物ではないからです。

第 5 週 ― 第 3 日

『卓上語録』（1532）より

マルティン・ルター

庭に巣を作っていた鳥たちが、近寄っただけで飛び去ったとき、ルターはこう語った。「ああ、かわいい鳥たち、なぜ逃げるのだろう。お前たちが私を信じさえすれば、なんでも好きなものを与えるのに。」そしてルターは巣から離れ、こう語った。「この鳥たちのようにでなく、わたしたちは神を信じなければならない。神は心の底からそう望んでおられる。わたしたちのためにその独り子をさえお与えくださった神は、わたしたちが滅びるのを決して望んでおられない。」

搾取と乱用ではなく、世話と利用を（創世記 2:15）

マルティン・カップ、ルーテル、フランス

主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。

もしも、地球が一つの庭のようだったらどうでしょう。フランスのアルザス地方にあるシラースドルフという小さな村で、私は子ども時代を過ごしました。そこは牛の数が人間の数よりも多いようなところで、私の家には広大な庭がありました。

母には園芸の才があり、母の庭は情熱を注ぐところでも喜びでもありました。何時間も外にいて、土の上にかがみ、ふさわしい時期に植えたり、掘ったり、種をまいたり、水をやったり、収穫したりするのです。化学製品を使わない、オーガニックの庭でした。

母の上気した頬や、額の汗や、爪についた土や、使い古したズボンや、疲れた表情を、私は覚えています。それと同時に、母の笑顔や、のんびりと歩き回る様や、通りかかった人たち――自分で園芸をする人たちや、この「フィフティ・シェイズ・オブ・グリーン（緑の50の影）」［話題になった小説のタイトルのもじり］が大好きな人たち――との長い長いおしゃべりをも思い出すのです。

母は大地を耕し、私たちはその美しい実りである、花や野菜の入り交じった庭を楽しみました。この庭は天然の美しさと、おいしくて健康的なオーガニックの食べ物を与えてくれました。世話と利用。単純で、素朴で、確かな営みです。

庭というのは定義上、手つかずの、荒れ果てた、自然のままの場所を指すのではありません。庭は創造の一部であり、人間の手によって耕され変えられていくものです。人間の手は、癒すことも傷つけることもできます。育むことも搾取することもできます。守ることも乱用することもできます。私たちは手のひらを広げて生きていくことも、こぶしを握り締めて生きていくこともできるのです。

私はシラースドルフでの子ども時代の思い出を、大事に胸にしまっています。きっと、一見して気づくよりももっと多くのことを、この物語について語ることができるでしょう。そもそも、アダムもエバも、エデンの園を耕し守るようにと神が命じたことを果たすために、必要とされたのです。

第 5 週 ― 第 4 日

「太陽の歌」（1225 頃）

アシジの聖フランシスコ

いと高い、全能の、善い主よ、
　　賛美と栄光と誉れと、すべての祝福はあなたのものです。

いと高いお方よ、
　　このすべては、あなただけのものです。
　　だれも、あなたの御名を呼ぶにふさわしくありません。

私の主よ、あなたは称えられますように、
　　すべての、あなたの造られたものと共に。
　　太陽は昼であり、あなたは太陽で私たちを照らされます。

太陽は美しく、偉大な光彩を放って輝き、
　　いと高いお方よ、あなたの似姿を宿しています。

私の主よ、あなたは称えられますように、
　　姉妹である月と星のために。
　　あなたは、月と星を天に明るく、貴く、美しく創られました。

私の主よ、あなたは称えられますように、
　　兄弟である風のために。
　　また、空気と雲と晴天とあらゆる天候のために。
　　あなたは、これらによって、
　　御自分の造られたものを扶（たす）け養われます。

私の主よ、あなたは称えられますように、
　　姉妹である水のために。
　　水は、有益で謙遜、貴く、純潔です。

私の主よ、あなたは称えられますように、
　　兄弟である火のために。
　　あなたは、火で夜を照らされます。
　　火は美しく、快活で、たくましく、力があります。

私の主よ、あなたは称えられますように、
　　私たちの姉妹である母なる大地のために。
　　大地は、私たちを養い、治め、
　　さまざまの実と色とりどりの草花を生み出します。

神の栄光と地球全体（詩編 72:16-19）

レーナ・エドルンド、ルーテル、スウェーデン

この地には、一面に麦が育ち
山々の頂にまで波打ち
その実りはレバノンのように豊かで
町には人が地の青草ほどにも茂りますように。
王の名がとこしえに続き
太陽のある限り、その名が栄えますように。
国々の民は皆、彼によって祝福を受け
彼を幸いな人と呼びますように。
主なる神をたたえよ
イスラエルの神
ただひとり驚くべき御業を行う方を。

栄光に輝く御名をとこしえにたたえよ
栄光は全地を満たす。アーメン、アーメン。

クリスチャンはしばしば、創造主である神（創世記 1:1）について学ぶことから霊的な旅を始めます。創造の神は昼と夜を造り、動物を造り、人間を神の像として、神の創造物に配慮し関わるように造られました。

私たちは、そのような神の創造の計画に逆らって（創世記 3:6-7）、神を悲しませてきました。神はお造りになったすべてのものに良さを見出される方であり、人間には良いことを行う力があります。しかし私たちは、何度も何度も失敗してきたのです。私たちは、命そのものである神を辱めてきました。しかしすべてのことは創造の始めから変わらず、人間は神の造られた世界に対する責任を、今なお負っているのです。

神は人間の責任を変えるのではなく、神と人間との関係を変えられました。神はイエスを送り、人間の生活を経験させられました。イエスは天と地との、まことの神とまことの人との懸け橋です。イエスは創造の前にも後にも存在しておられます（ヨハネ 1:12-13）。神についての人間の理解をはるかに越えた、神の具現化がキリストなのです。今日における私たちとキリストとの身体的なつながりは、パンとぶどう酒、そして洗礼のサクラメント（聖礼典、聖奠）です。これらは、創造主から与えられた私たちの召命を思い出させてくれます。

どうすれば、神からの召命に応えて生きることができるでしょうか。第一に、神は唯一であり、それゆえ私たちも人間として一つであるべきである（1 コリント 12:12）ということを認識しなければなりません。これは、神がすべての人間を呼んでおられることを意味します。加えて、私たちがすべての生き物や地球そのものだけでなく、国籍や信仰を超えたすべての人々に対して配慮し、関わるべきであるということをも意味するのです。

この重い責任を、どこから果たしていけばいいのでしょうか。

創造という、神が始められたところから、私たちも始めましょう。命

を尊重するのです。食べ残しをせず、責任を持って消費活動をしましょう。地元で採れた季節の食品を買いましょう。肉を食べるのをやめるか、食べる量を減らしましょう（創世記 1:29 において、神は植物と果物を食べ物として人間に与えてくださっています。創世記 2:18-19 によれば、動物は私たちと共に生きるために与えてくださったものです）。可能であれば有機食材を買うか、自分で育ててみましょう。さまざまな方法で、地球に配慮することができます。

神は、関係の神であると同時に、ご自身の一致（父、子、聖霊）を生きられる神です。その神に倣うよう、私たちは促されているのです。神とだけでなく、すべての創造物との関係と一致（マルコ 12:30-31）を追い求めてゆきましょう。こうすることで、すべての人とすべてのものに配慮して関わるという神からの召命を、真に受け入れて尊重することができるのです。

第 5 週 ― 第 5 日

「ディダケー」（95 頃）よりの祈り

野にまかれていた麦と、丘に散っていたぶどうとが、この食卓のパンとぶどう酒にあって今ひとつとされているように、主よ、あなたの教会全体が、地の隅々から御国へとすみやかに集められますように。アーメン

創造と共同体（使徒言行録 2:42-47）

クリス・マクラウド、聖公会、オーストラリア

彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった。

すべての人に恐れが生じた。使徒たちによって多くの不思議な業としるしが行われていたのである。信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人々を日々仲間に加え一つにされたのである。

気候は変動し、海面は上昇し、降水量の変動により干ばつは長引き、季節の変化は予想できないように思われ、生態系は危機にさらされており、さまざまな動物種が絶滅の危機にあり、自然と関わる仕事を通して収入を得ている人たちの間には大きな不安がある。これが、21 世紀におけるオーストラリアの生活の、厳しい現実です。そして、最もこの影響を受けているのが、離れたところに住んでいる、アボリジニとトレス諸島民です。この人々の生活環境は、ほとんど耐えられないほどにひどい状況になっています。しかし、人類が神の創造物の良い管理者でいられなかった結果として、すべての人が何らかの形で環境問題の影響を受けている姿を、私たちは眼のあたりにしています。

初代教会の信者たちは、共同体の中で神の惜しみない豊かさを体験しました。彼らは持ち物を分かち合い、「すべての物を共有にし」ていました（使徒言行録 2:44）。共同体の一人ひとりが、他の人々への責任を持っているという強い認識もありました（使徒言行録 2:45）。これらすべてのことは神の導きのもとに行われ、祈りと礼拝によって支えられていました（使徒言行録 4:27）。公共の善を求めることが、初代教会の信者たちにとっての最優先事項だったのです。

共同体としてのこのような感覚は、世界の多くの先住民族の文化にも見られるものです。私たちは共に生きていくために存在しており、そして何にもましてまず、共同体に責任を持ちます。神の創造物への配慮ある関わりは、共同体へのものでもあります。この二つの結びつきは切り離すことができません。つまり、神による創造を軽視することは、共同体を損なうことになります。クリスチャンとしての責任は、マルティン・ルターや他の宗教改革者を駆り立てたのと同じ、正義の熱い思いをもって、神によって創造されたもの、また世界大の共同体との関係を修復することにあります。

第 5 週 ― 第 6 日

アングリカン・コミュニオン　宣教の 5 指標

神の国のよき知らせを宣言すること

新しい信徒を教え、洗礼を授け、養うこと

愛の奉仕によって人々の必要に応答すること

社会の不正な構造を改革し、あらゆる暴力に反対し、平和と和解を追求すること

被造物の本来の姿を守り、地球の生命を 維持・再生するために努力すること

共有される豊かさ（申命記 15:7-11）

タボ・マホバ、聖公会、南アフリカ

あなたの神、主が与えられる土地で、どこかの町に貧しい同胞が一人でもいるならば、その貧しい同胞に対して心をかたくなにせず、手を閉ざすことなく、彼に手を大きく開いて、必要とするものを十分に貸し与えなさい。「七年目の負債免除の年が近づいた」と、よこしまな考えを持って、貧しい同胞を見捨て、物を断ることのないように注意しなさい。その同胞があなたを主に訴えるならば、あなたは罪に問われよう。彼に必ず与えなさい。ま

た与えるとき、心に未練があってはならない。このことのために、あなたの神、主はあなたの手の働きすべてを祝福してくださる。この国から貧しい者がいなくなることはないであろう。それゆえ、わたしはあなたに命じる。この国に住む同胞のうち、生活に苦しむ貧しい者に手を大きく開きなさい。

福音の中心には神の本質と特徴の啓示があり、その物語は神の愛の力がイエスを通してどのように現わされたかを語るものです。イエスにおいて宣言された神の贖いの業は、神の人類への愛からくるものであり、私たち人類を救うためのものだと理解されることがよくあります。確かに、聖書は神が人間を心に留めておられることを描いていますが、これは人間だけでなく、創造の秩序全体に対して神が根本的な責任を持ち、関わってくださるということに関係づけられてはじめて、適切に理解することができます。神が人間と交わした契約の関係性は、創造されたすべてのものとの間の、より広い契約の関係性でもあります。

神と創造物との関係は、三位一体の位格［父・子・聖霊］の間に存在する、愛に基づく動的で自己奉献的な関係を表現し、それを反映するものです。神にとっての目標は、聖なる生き方を特徴づけるものである自由、安息、喜びを、被造物が共同体として分かち合うことにあり、この目標は「シャローム」という概念のうちに表現されます。私たちが生きているこの恵みの状態は、信仰信条（信経）に要約されています。すなわち、私たちはすべてのものの創造主としての父なる神、歴史の中でこの地上に生き、私たちを贖うために苦しみ死なれた方であるイエス・キリスト、そして私たちの近くにおられ、新たな命を与え新たな創造の業を行われる聖霊なる神を信じるだけでなく、その三位一体の神に自分自身を関係づけているのです。

私たちが「創造は売り物ではない」と語るとき、それは私たち人間が行おうとするすべてのことに神が関わるような、神を中心とした世界と

いう文脈で語られなければなりません。それには政治、経済、技術、科学など、社会のすべてが含まれます。神の恵みは創造のうちに現れ、いつも私たちを包み込んでいます。現実的な意味では、神が創造の業を通して私たちに授けた共有の豊かさを分かち合うこと、すなわち私たちの時間、能力、金銭、所有物を用いるにあたり、恵み深い心を持つことによって、この豊かさに応答していくことが求められています。このように考えることで、過去のキリストを現在のキリストとするという大きな課題、神によって創造されたすべてのものの管理者として私たちクリスチャンが生きるという大きな課題と、より現実的に向き合っていくことができます。

第５週 ― 第７日

『大教理問答』第３戒

マルティン・ルター

安息日と私たちが呼んでいるのは、ヘブライ語の安息日にならった名称で、この語は本来「休業する」すなわち「仕事を休む」という意味である。私たちが通常「仕事を終えて休息する」とか、「休息させる」ということばを使うのもそこからきている。…それで、「安息日を聖とせよ」とはどういう意味であるのかとたずねられたなら、「安息日を聖とするとは、これを聖く守ることである」と答えるがよい。では「聖く守る」とはいったいどういうことなのか。それは、聖なることばを口にし、聖なるわざと聖なる生活をすることにほかならない。その日はそれ自身のためには聖とせられることを要しない。安息日はそれ自身聖く作られているからである。けれども、神は安息日があなたにとって聖なるものとなることを望みたもう。つまり、あなたが安息日に聖なる事がらをなすか、聖でない事がらをなすかによって、すなわち、あなたしだいで安息日は聖なるものともなり、聖でないものともなるのである。

安息の年とヨベルの年（レビ 25:1-12）

ニール・ヴァイガース、聖公会、イギリス

主はシナイ山でモーセに仰せになった。

イスラエルの人々に告げてこう言いなさい。

あなたたちがわたしの与える土地に入ったならば、主のための安息をその土地にも与えなさい。六年の間は畑に種を蒔き、ぶどう畑の手入れをし、収穫することができるが、七年目には全き安息を土地に与えねばならない。これは主のための安息である。畑に種を蒔いてはならない。ぶどう畑の手入れをしてはならない。休閑中の畑に生じた穀物を収穫したり、手入れせずにおいたぶどう畑の実を集めてはならない。土地に全き安息を与えねばならない。安息の年に畑に生じたものはあなたたちの食物となる。あなたをはじめ、あなたの男女の奴隷、雇い人やあなたのもとに宿っている滞在者、更にはあなたの家畜や野生の動物のために、地の産物はすべて食物となる。

あなたは安息の年を七回、すなわち七年を七度数えなさい。七を七倍した年は四十九年である。その年の第七の月の十日の贖罪日に、雄羊の角笛を鳴り響かせる。あなたたちは国中に角笛を吹き鳴らして、この五十年目の年を聖別し、全住民に解放の宣言をする。それが、ヨベルの年である。あなたたちはおのおのその先祖伝来の所有地に帰り、家族のもとに帰る。五十年目はあなたたちのヨベルの年である。種蒔くことも、休閑中の畑に生じた穀物を収穫することも、手入れせずにおいたぶどう畑の実を集めることもしてはならない。この年は聖なるヨベルの年だからである。あなたたちは野に生じたものを食物とする。

「売り物ではない」3 つのテーマ、「救い」、「人間」、「創造」はすべて安息日とヨベルの年からきています。安息日は一週間に一日、休息を与えるものです。ここで創造は、人間の生活と密接に結びつき、7 年周期のヨベルの年と合わせ、「完全な休息」として与えられた時です。個人的にも農業の観点からも、このような一定の周期で休息を設けることはとても有益です。ヨベルの年は、創造や土地の一部として生活し働く人々に、多大なる恩恵をもたらしました。ヨベルの年を実現するためには、すべての者が負債や貧困から解放されねばならず、しかもすべての土地を神の民が利用できるようにする必要がありました。なぜなら、土地は神だけのものだからです。

安息日とヨベルの年は、存在するものはすべて神に属し、創造と歴史は神に立ち返ることにおいてのみ、その目的と達成とを見いだすものだということを宣言しています。創造物も人も、救いのために神に完全に頼っています。ヨベルの年は、私たちの罪に対する神の応答です。それは悔い改めの機会であり、神の恵みによる贖いという賜物なのです。イスラエルには赦しと回復とが与えられ、そのこと自体が全世界に向けた神の望みのしるしです。

「ルカによる福音書」第 4 章にあるように、イエスは主の恵みの年について説教する際に、安息日とヨベルの年を中心に置いています。イエスは神にとってのヨベルです。神の愛と惜しみない豊かさのすべてが、贖いと新たな創造において、キリストのうちに集められ、実現されます。「あなたがたの救われたのは恵みによるのです」（エフェソ 2:5）は、ヨベルについてのメッセージであり、宗教改革を特徴づけた教えの中核をなすものでもあります。

今日、最初のヨベルの宣言にあったように、多くの人々は負債と貧困の中で生き、土地と仕事から疎外されています。地球の資源は乱用され、買いだめされています。何百万もの人々が未だに救いと、神による真の休息を必要としているのです。

第 6 週：仕えるための自由―ディアコニア

序

ヘレン・テルネバーク－スティード、聖公会／ルーテル、アイルランド

平和のうちに行きましょう。主を愛し、主に仕えるために。

深刻な病状の生後 1 週間の息子ウィリアムが救急車で運ばれて病院に着いたとき、暖かく優しい病院のチャプレンが出迎えてくれました。病院は家から 4 時間も離れたところでした。その時交わした会話で私が覚えているのは一言だけです。チャプレンのジョイスは静かな声で、「客用のベッドを用意しています」と言ってくれました。その日からウィリアムが亡くなる 1 月の土曜日までの 2 か月間、ジョイスの客用の寝室が私たちの家になりました。

私がこの話を皆さんと分かち合いたいと思ったのは、ジョイスとウィリアムが「弟子であること」とはどういうものなのか、とても深いところで教えてくれたからです。早産で小さな息子ウィリアムは、命とは、そして愛とは何であるのか、その本質を明らかにしてくれました。彼は、真実の愛とは常に無条件であり、報酬や見返りを得るためのものではない、ということを教えてくれました。まさしくそうなのです。息子と過ごした 9 週間は、暖かさと愛にあふれていました。ジョイスは自分の家を私たちと共有することで、私たちがこれまでで最も傷つきやすかったときに助けをさしのべてくれました。彼女は、深い思いやりの心を持って私たちに関わり、私たちと主との両方に尽くしてくれたのです。

祈りのうちに過ごしたその最後の週は、私たちを「弟子であること」の最たる本質へと立ち返らせてくれました。それは、私たちのキリスト教信仰を日々の生活の中で生きることです。つまり、福音を生きるよう

にと私たちは促されたのです。それは主を愛し、主に仕えることであり、また知人であろうとなかろうと隣人を愛し、隣人に仕えることです。イエスは言われました。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」（マタイ 25:40）。これはやってもやらなくてもいいようなことではなく、義務として命じられており、私たちはそれを「ディアコニア」と呼んでいます。信ずるすべての人たちが、この働きに参加するよう任じられています。

ディアコニアはさまざまな形を取ります。それは、世界のそれぞれの地域に違いがあること、私たちの周りの人々の弱さはさまざまで、その必要とするものが多岐にわたることによります。そのため、ディアコニアは常に同じとは限りません。それは置かれた状況に依存しており、それぞれの国や時代に応じた個別の形を取ります。けれども、すべてのディアコニアには共通点があります。それは、弱く傷つきやすいものに向けられる、愛に動機づけられた奉仕であるということです。ディアコニアを生きるとき、そこには神の国の先取りの姿が現れます。それは、証しすること、擁護すること、見ること、身体的・精神的・霊的な面での人間の基本的な求めに応えること、弱いものに力を与え、深く心を寄せて関わる姿を示すこと、不正とそのあらゆる原因とをあらわにすること、これらを預言者として行うことです。

これからの数日間の祈りを通じて、ディアコニアとは絆創膏を貼って済ませられる、ちょっとした傷を治すような働きではないことをおわかりいただけるでしょう。それは、私たちの存在そのものの一部なのです。そして、主を愛し、主に仕えることなのです。

第 6 週 ― 第 1 日

『祈祷書』朝の礼拝 第 2 特祷「平安のため」

親しみを好み、平安を与えてくださる神よ、永遠の命は主を知ること、完全な自由は主に仕えることにあります。どうか主の僕らをすべての敵から守り、わたしたちがあらゆる困難を恐れず、堅く主に頼ることができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

宣教を担う人々（ルカ 4:18-19）

メアリー・ルイス、聖公会、オーストラリア

主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に視力の回復を告げ、圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。

「主の霊がわたしの上におられる。」イエスは、「イザヤ書」第 61 章が記された巻物を開き、会堂（シナゴーグ）の会衆にとっては聞き慣れた内容の一節を読み上げました。それは、神の恵みの時を告げ、神の審きと敵の滅びとを祝う内容が記されていました。しかしイエスは途中で読むのをやめ、主の恵みの年の告知を読み、席に着きました。そこにいるすべての人たちの注目を集める中、彼はこのように話し始めます。「こ

の聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」（ルカ 4:21）。イエスの到来は、神の恵みの時の広がりを告げ知らせています。完成の時――審判とシオンの再興の時――はやがて訪れますが、しかしまだその時は来ていません。この恵みの日に、イエスは仕えるために来られました。迷える人々を探し求め、救い、そして捕らわれている人々や虐げられている人々を解放するために。勝利のメシアは待っておられるのです。

医療宣教師としてネパールで働いていたとき、私たちが自分の働きに集中できるような手助けをしてもらいました。帰宅すると家は片付いていて、温かな料理が準備されており、服にはアイロンがかかっているなど、何という自由を与えられていたことでしょうか。特に病院や教室が疲労感に包まれ、ピリピリした雰囲気が漂い、互いの理解が難しいとき、それが何という恵みだったことでしょうか。教えたり、病院で働いたり、生徒たちと交流したり、イエスの良き知らせ―福音―を分かち合ったりという、他のことができるような助けを与えられていたことを、神に感謝しました。

私たちは「主の恵みの年、神の恵みの時」に生きています。福音により解放され、油を注がれた私たちは、神が主イエスを通じて世界に自由と癒やしとをもたらしてくださる、という福音と共に遣わされました。私たちは、この日、恵みと癒やしの日に生きる者です。この呼びかけは急を要するものです。この日の終わりはいつなのでしょうか。私たちは宣教を託された神の民です。世界に仕える神の僕です。戸口で立ち止まるのはやめましょう。イエスのおかげで、もう束縛されても捕らわれてもいないのです。聖霊の自由のうちに一歩を踏み出し、他の人たちもまた自由を味わえるよう、その人々に仕えましょう。

第６週 ― 第２日

『アウグスブルグ信仰告白』（1530）第 6 条

また、次のように教える。すなわち、そのような信仰はよい実と、よい行為とをもたらさずにいない。また人は、神が命じられたあらゆる種類のよい行為をなさなければならない。しかし、神のためにわれわれはそれをなすのであって、決してそのような行為に信頼し、それによって神のみ前に恵みを得るためではない。なぜなら、我々は罪の赦しと義とをキリストを信じる信仰によって受けるからである。それは、キリストご自身が「自分に命じられた事をみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい」（ルカ 17:10）と言われたとおりである。教父たちもそのように教えている。そこで、アンブロシウスも「それゆえ、キリストを信じる者は救われ、行為によってではなく、ただ信仰によってのみ、何の功績もなしに罪の赦しを得ることは、神が定めたことである」と言っている。

自由としての奉仕（ローマ 13:8）

トロン・ファーガモン、ルーテル、ノルウェー

互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。

最近、かつて両親が私に読んでくれた本を、子どもたちに読み聞かせています。子どもたちのいちばんのお気に入りは、ノルウェーの作家トールビョールン・エグネールが書いた『カルデモンメのゆかいなどろぼうたち』です。子どもたちがこの本のとりこになるのは、もっともだと思います。この本が描いているのは、3 人の泥棒が人々から赦され、愛され、認められることにより、罪を犯すのを止め、その土地の共同体において多くの人から尊敬される住民になっていくという、感動的な物語です。しかし、大人になった今、この本を読み返してみて、その道徳観がだんだんと心配になってきました。

カルデモンメには変わったところがたくさんありますが、その一つは、たった一つの決まりにより治められているということです。その決まりとは、他人に迷惑をかけてはならず、親切に思いやりを持って接しなければならず、そのほかは自分がしたいようにしていい、というものです。一見すると良い決まりのように思えますが、よく考えてみると、そんなに自信はありません。実際、この決まりが言おうとしていることは何だろうか。人生の意味というのは、自分がしたいようにすることなのだろうか。そのような自由とは、共同体の束縛から解放されること、つまり他人にわずらわされないということなのではないだろうか。このような疑問が湧いてきたのです。

夜、子どもたちに『カルデモンメのゆかいなどろぼうたち』を読み聞かせることと並行して、私は同僚と共にルターの著作集に関する仕事をしていました。私たちが印刷すべく準備をしていた著作の一つは、「キリスト者の自由」でした。この著作の中で、ルターはカルデモンメの決まりに似たことを述べています。すなわち、キリスト者は法から自由な者であって、誰にも服しない、と。しかし、ルターの言葉はそれで終わりではありません。彼は続けて、同時にキリスト者はすべての者に服する、完全に忠実な僕であると述べているのです。言い換えれば、キリスト者の自由とは「～からの自由」ではなく「～のための自由」、特に「奉仕するための自由」なのです。そしてこのことが、「ローマの信徒への

手紙」の中で、「互いに愛し合うことのほかには、だれに対しても借りがあってはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです」（ローマ 13:8）と書いたパウロの伝えようとしたメッセージでもあったのだと、私は信じています。

第 6 週 ― 第 3 日

「キリスト者の生活の祈り」（1912 頃）、通常アシジの聖フランシスコに帰されるもの

神よ、
わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。
憎しみのあるところに愛を、
いさかいのあるところにゆるしを、
分裂のあるところに一致を、
疑惑のあるところに信仰を、
誤っているところに真理を、
絶望のあるところに希望を、
闇に光を、
悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。
慰められるよりは慰めることを、
理解されるよりは理解することを、
愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。
わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからからゆるされ、
自分を捨てて死に、
永遠のいのちをいただくのですから。

ディアコニアを生きる神の民（マタイ 25:35-40）

イルディコー・ベレイ・シシュカ、ルーテル、ハンガリー

> **王は右側にいる人たちに言う。「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」すると、正しい人たちが王に答える。「主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。」そこで、王は答える。「はっきり言っておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」**

私はその人たちを見ました。母親と子どもが、飢え、寒さに震え、裸で、迫害を受けていました。その目には、恐怖と不安が見てとれました。その人たちは、突然の動きや時々聞こえる大きな声におびえていたのです。支援を必要としている人々について、報道では多くのことが伝えられていますが、そうした人々との直接の出会いは衝撃的で、人生を変えてしまうような体験ともなり得ます。8 年たった今でさえ、その子どもたちと親たちの名前を、そのひどい服を、突然知らない街に逃げて来なければならなくなった次第を語った言葉を、思い出すことができます。そして今日でも、いっしょにいられること以外のすべてをその人たちが失っていたことを、はっきり覚えています。

このような状況を受け入れるのは間違いなくつらいことですし、その人たちから見れば「向こう側」にいる私たちが扉を広く開け、自分たち

の責任を引き受けるのは極めて重要なことです。その人たちがこの傷ついた姿で最初に出会うのは、世話をする私たちです。私たちは飢えた人たちに食べ物を与え、喉の乾いた人に飲み物を与えはします。しかしそうした人々を世話するということは、単なる身体的な関わりではないのです。

母親が父親から虐待を受けているのをずっと見てきた子どもは、神が愛にあふれる父親のように心を寄せてくださる方であるとか、たとえそのような状況の中でも共におられる方だということを、はっきり理解することはできません。身体的な援助に加え、それぞれの場合に応じたさまざまな心理的・精神的な関わりが求められます。母親の心が凍えているなら、コートは役に立ちません。子どもが十分に愛を受けることができないなら、食べ物はなんの役にも立たないのです。身体的な意味においても感情的な意味においても、寒さを感じる人がいてはなりません。愛されていないという気持ちを抱く人がいてはなりません。こうした子どもや親は、彼らが逃げ出さざるを得なかった過酷な世界のゆえに、愛に飢え、愛の言葉に渇き、寒さを感じています。

クリスチャンとして、私たちがなし得る最も価値ある貢献は、愛に飢えている人々に本当の愛を、愛の言葉に渇いている人々に私たちを導いてくださる神を示すこと、そして希望の父である神は決して私たちを忘れないという約束の「服」を、その人たちに着せてあげることです。この約束が与える「服」は、どんな子どももそれなしに成長することができず、またどんな天候でも破壊することができないものです。そしてこの「服」によって、その人々はこれからの人生の基礎を堅く築くことができるのです。

第 6 週 ― 第 4 日

『アウグスブルグ信仰告白』（1530）第 7 条

また、次のように教える。唯一の聖なるキリスト教会は、常に存在し、存続すべきである。それは、全信徒の集まりであって、その中で福音が純粋に説教され、サクラメントが福音に従って与えられる。

また、キリスト教会の真の一致のためには、福音がそこで純粋な理解に従って一致して説教され、サクラメントが神のみことばに従って与えられるということで十分である。人間によって定められた同じ形式の儀式が、どこででも守られるということは、キリスト教会の真の一致にとって必須ではない。それはパウロがエフェソの信徒への手紙 4 章（5、6 節）に「体は一つ、霊は一つです。それは、あなたがたが、一つの希望にあずかるようにと招かれているのと同様です。主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ」と言っているとおりである

宣教における協働関係（パートナーシップ）（フィリピ 1:3-8）

モティ・ダバ・フファ、ルーテル、エチオピア

わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。それは、あなたがたが最初の日から今日まで、福音

にあずかっているからです。あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています。わたしがあなたがた一同についてこのように考えるのは、当然です。というのは、監禁されているときも、福音を弁明し立証するときも、あなたがた一同のことを、共に恵みにあずかる者と思って、心に留めているからです。わたしが、キリスト・イエスの愛の心で、あなたがた一同のことをどれほど思っているかは、神が証ししてくださいます。

パウロはフィリピの人々一人ひとりを、また群れ全体を思い起こして、彼らのために熱心に祈りつつ、密接なつながりを保っていました。フィリピの信者たちは、自分たちの命に危険が迫っているのは明らかだったにもかかわらず、パウロが神の業と考えていた宣教の働きにおいて、パウロと連帯していました。今日の教会にとってのこの働きとは、キリストの愛・赦し・一致を通しての協働関係（パートナーシップ）を示す機会であり、また神学的・倫理的な問題に関して、私たちを分裂させる恐れのある隔たりに橋を架けることです。では、宣教における協働関係が本質的にどういった意味を持つのかについて、考えてみましょう。

協働関係が前提とするのは、私たちのお互いの関係が、三位一体の神の関係的な特質を反映したものだという認識です。私たちは一人では存在できません。私たちが使徒信条（使徒信経）で告白するように、私たちはイエス・キリストの一つの体のあらゆる部分です。イエスは私たちを一つの群れとして、宣教に参加するよう呼びかけています。

協働関係は、私たちのお互いの関係において、具体的になっていきます。イエスは、私たちの良き業を支えてくださる方です。私たちは罪人ですが、平和に生き、赦す者であり、証する者であり、公共善を共有し、隣人を愛することによって、この世の兄弟姉妹のために、一つの模範となるよう努めています。

協働関係は、イエス・キリストの再臨の時まで、全体としての一致を世界大で共に歩むことを意味します。地上での最後の働きの中で、イエスは兄弟姉妹間の一致を祈りました。同じように、神の恵みによって、私たちは伝統的な障壁を乗り越え、協力に向けて共に働くことに、懸命にならなければなりません。

私たちの共通の召しに対する忠実さにおいて、私たちは唯一の、聖なる、公同の、使徒的な教会における、完全に目に見える一致を目指さなければならないのです。共に旅する中で、私たちはイエス・キリストの福音に信頼し、そして同時に神の恵みにあずかります。このことが、私たちの心と生活とを、同じ旅路にある兄弟姉妹に開き、そして神の愛を分かち合うようにと導くのです。

最後に、宣教における協働者であるということは、イエス・キリストの良い知らせ―福音―を広め、また他者のために祈ることに加わるという意味であることを、この聖書箇所は思い起こさせます。パウロはこのゆえに、神を賛美せずにはいられなかったのです。

第 6 週 ― 第 5 日

『祈祷書』三位一体後第 4 主日特祷

すべて寄り頼む者の守り主である神よ、あなたに寄らなければ強くまた清い者はありません。どうかみ恵みを増し加え、主の導きに従って、この世のものに心を奪われず、常に永遠の賜物を失うことがないようにしてください。天の父よ、この願いを主イエス・キリストのいさおによってお聞き入れください。アーメン

受肉と臨在（イザヤ 43:1-3）

シンシア・ヘインズ－ターナー、聖公会、カナダ

ヤコブよ、あなたを創造された主は
イスラエルよ、あなたを造られた主は
今、こう言われる。
恐れるな、わたしはあなたを贖う。
あなたはわたしのもの。
わたしはあなたの名を呼ぶ。
水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。
大河の中を通っても、あなたは押し流されない。
火の中を歩いても、焼かれず
炎はあなたに燃えつかない。
わたしは主、あなたの神

イスラエルの聖なる神、あなたの救い主。
わたしはエジプトをあなたの身代金とし
クシュとセバをあなたの代償とする。

奉仕と、僕としての奉仕職。教会内で頻繁に用いる言葉ですが、あまりに頻繁すぎてその言葉が力を失いかねない恐れがあります。イエスが弟子たちに、「私は仕えられるためではなく、仕えるために来た。あなたたちも同じようにしなさい」と言われたことは、弟子たちにとって衝撃的でした。彼らの先生、ラビ［ユダヤ教の教師］、癒やし手、そして友である方が、自分自身をそのように低い身分と見なしておられたからです。現代の権力構造は当時のものとは異なるかもしれませんが、それでも経済的・政治的・社会的な地位や、名声に基づく階層構造があることは間違いありません。「仕える」とか「僕となる」という考えは、社会的な規範とは相容れず、未だに革新的なものなのです。

介護業界で働いている知人の若い女性が、ある時私に言ったことがあります。病気で身体に不自由がある人や、寝たきりのお年寄りの世話をするのが嫌だという気持ちにはなったことがない、それは自分の仕事がその人々に安心と心地よさを与えているからだと。彼女はこの仕事で給与を得ているものの、患者たちに心から関わるという精神が、仕事を真の奉仕たるものにしています。それが彼女のささげているものです。関わる相手の人に、大事にされ、尊重されていると感じてもらうことです。

私たちが奉仕するときに直面する誘惑は、イエスがその働きを始めたばかりの頃に直面し、それにあらがったものと似ていなくはありません。私たちは、他の人たちの上に立つ権力を持てる地位や、奇跡を起こしてすべてを正したいという欲望に、惹かれることがあります。私たちは時に、奉仕した相手から感謝の気持ちを十分に感じられなかったり、お礼の言葉がなかったりすると、いらだちを覚えることもあります。けれどもそれは、奉仕とは正反対です。

イエスは、それぞれの人たちや状況に応えて、その人が清いか清くな

いか、サマリア人かユダヤ人か、男か女か、などといったこととは関係なく、ご自身をささげることを選ばれました。そしてしばしば、その業によって、多くの人の人間としての尊厳や価値が確かに回復されたのです。

神の恵みにより、私たちは代価なく与えられた行いによって、見返りなどを求めずに奉仕する自由を与えられているのです。

私たちは自分の中の最高のもの、内なるキリストの霊に従って奉仕します。何かの条件のあるなしで贈り物を与えるのではありません。神によって造られた人々に奉仕することによって、自らをささげて神に仕えるのです。

第 6 週 ― 第 6 日

「聖ペトロの第一の手紙についての説教」

マルティン・ルター

だれでも、自分の務めや自分に与えられた賜物に心をとめなさい。そしてそれに気づいたら、その賜物を隣り人への奉仕のために使いなさい。

賜物は分かち合うために（1 ペトロ 4:10）

ノベルト・ラッシュ、ルーテル、アルゼンチン

あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。

私は障がい者の世界に住んでいます。私は教会で、障がいを持つ人たちへの牧会的な奉仕活動を担当しているのです。私の息子は事故により障がい者となりました。教会内外の多くの人々が、障がいを持っている彼らの最愛の人についての相談を私に持ちかけます。私は毎日のように、「彼はこれができない」とか、「彼女はあれのやり方を知らないの」といった言葉を、特に障がい者の同伴者から、しかしそれ以外の人からも聞いています。

私の教会で、障がいを持っている人々を指して「あれこれができない

人」と言う人が大勢います。日常生活において、あるいは礼拝において、私たちの多くが簡単にできることを彼らができないであろうことは、はっきりしています。しかし重要なことは、神様との私たちの関係は、これらの単純な事柄によって形作られているのだ、ということです。全員がユニゾン［斉唱］で歌います。「彼らにはそれができません」。私たちは礼拝で同じ動きをし、ひざまずきます。「彼らにはそれができません」。私たちは皆で聖書を読みます。しかし視覚障がい者には「それができません」、など。私たちはこの「できないこと」について長いリストを作ることができますが、一方で、「できる」者と同じく神の子である人々を信仰共同体から締め出していることに気づいていないのです。

分かち合われるようにと備えられている思いがけない賜物を想像するために、多くの問題点について考えることはできます。神は私たちに賜物を与えられ、その賜物を私たちは分かち合わなければならないのであって、独り占めしてはならないということを、私たちは何度も何度も繰り返し、説教したり教えたりしてきました。だとしたら、なぜ私たちは、障がいを持つ人々に分かち合うべき賜物はない、と考えたりしてしまうのでしょうか。

障がいを持った人と親しくなり、その愛の賜物を発見したり、その心の奥から発せられる神を賛美する声を聞いたりしたことがありますか。

すべての賜物は分かち合われるためにあり、障がいを持つ人に神が与える賜物が少ないなどということはないのです。それでは、準備をしましょう。

第 6 週 ― 第 7 日

聖アウグスティヌスの祈り

永遠にいます神よ、
あなたを知る知恵の光、
あなたを愛する心の喜び、
あなたに仕える強い思い、
これらをわたしたちにお与えください。
まことにあなたを愛するためにあなたを知り、
まことにあなたに仕えるためにあなたを愛し、
あなたに仕えて完全な自由を得させてください。
わたしたちの主、イエス・キリストによって。アーメン

空しくない労働（箴言 16:3）

アリス・ウー、聖公会、香港

あなたの業を主にゆだねれば
計らうことは固く立つ。

私たちは、完全に理想的であるものに照らして、不完全なところを評価されたり強調されたりするような世界に生きています。そしてこの、「完全に理想的」というもの自体が、常に再定義され再構築されているのです。私たちは、いつまでたっても満足いくほど美しく、スリムで、

若くあるいは大人で、頭が良く、金持ちで、俊敏で、才能があり、成功しているということがありません。そして自分のすべてがダメとなったら、今度は自分の子どもが十分にかわいくないと考えます。私たちは、到底手の届かない可能性や、実現不可能な結果を絶えず追求し、失望の中に溺れることを恐れて、何もできなくなります。そして、無益な後悔、うつろな楽しみ、つまらない空想、逃したチャンス、これらに力を吸い取られます。

自分自身のために生き、自己満足を美徳とする生き方が、世界中で支持されています。このような生き方は、私たちを嫉妬と憤りと葛藤の地下牢へと送り込みます。常に動き続けるゴールポスト。そしてそれゆえに私たちを不完全だと責め続ける、終わりなき裁きの声。このようなものが現代の支配者、独裁者として、私たちを奴隷にしようとしています。

けれどもクリスチャンとしての私たちは、すでに解放されています。働いて恵みを得ることはできませんし、その必要もありません。この世的な期待という、危険なほどに高く置かれた鎖や、恐れの足かせ、そして人を無力にする、すべては無駄だという思いと、私たちは決別することができます。

そしてクリスチャンとしての奉仕において、私たちは無益さから解き放たれています。なぜなら、私たちと、私たちの仕事を神様にゆだねるとき、何一つとして空しいものはないからです。「キリスト者の自由」の中で、マルティン・ルターは言っています。私たちは「報いを考えずに」、「価なしに」働く。「隣人の必要以外の何物も眼前に持た」ず、私たちの働きは「感謝とか忘恩とか称賛とか非難とか利益とか損失などを、なんら顧みることがない」。

「完全な自由は主に仕えること」。祈祷書のこの言葉に出会うたびに、私は立ち止まるのです。神に仕えることは、私たちの理解を超えた神秘の一部となることです。神の創造を証しし、それを担うために。

注

（邦訳出典の記載がないものは、翻訳委員会にて原著の英文より翻訳した）

序文等

[1] オーストラリア聖公会とオーストラリアルーテル教会間の教会間対話の合意。*Common Ground: Covenanting for Mutual Recognition and Reconciliation between The Anglican Church of Australia and The Lutheran Church of Australia*, Report from the Anglican-Lutheran Dialogue in Australia, 2001

[2] ドイツ福音主義教会と英国教会間の教会間対話の合意。*On the Way to Visible Unity – A Common Statement*, Meissen, Germany, 18 March 1988

[3] 英国とアイルランドの聖公会諸教会とフランスのルーテル諸教会及び改革派諸教会間対話の合意。*Called to Witness and Service*, The Reuilly Common Statement, 1999

[4] 英国とアイルランドの聖公会諸教会と北欧・バルト地域のルーテル諸教会との完全相互陪餐関係の合意。*The Porvoo Common Statement*, Järvenpää, Finland, 9–13 October, 1992（邦訳：聖公会・ルーテル共同委員会編訳「ポルヴォー共同声明」、『共同の宣教に召されて : 聖公会・ルーテル教会の対話とヴィジョン』、教文館、2008、pp. 67-122）

[5] カナダ聖公会とカナダ福音ルーテル教会間で完全相互陪餐関係に入るにあたっての同意の協約。*Called to Full Communion: The Waterloo Declaration*, approved by the National Convention of the Evangelical Lutheran Church in Canada and the General Synod of the Anglican Church of Canada, Waterloo, Ontario, 2001

[6] 米国聖公会とアメリカ福音ルーテル教会間で完全相互陪餐関係に入るにあたっての同意の協約。*Called to Common Mission: A Lutheran Proposal for a Revision of the Concordat of Agreement*, adopted by the Churchwide Assembly of the Evangelical Lutheran Church in America and the 2000 General Convention of the Episcopal Church, 1999（邦訳：「共同の宣教に召されて同意の協約(CCM)」、『共同の宣教に召されて : 聖公会・ルーテル教会の対話とヴィジョン』、pp. 123-145）

伝統文書

※　伝統文書や本文で特に注記なく『祈祷書』とあるのは、Church of England（英国聖公会）の 1662 年版 *Book of Common Prayer* を指す。

第 1 週　第 1 日　「感謝：1. 一般」、『日本聖公会祈祷書』、p. 139

第 2 日　徳善義和訳『キリスト者の自由：訳と注解』、教文館、2011、pp. 48、271

第 4 日　江口再起訳

第 5 日　cf. 『日本聖公会聖歌集』第 557、558、559 番

第 6 日　「特祷：特定 6」、『日本聖公会祈祷書』、p. 228

第 2 週　第 1 日　「諸祈祷：44. 聖書を読む前の祈り」、『日本聖公会祈祷書』、p. 134

第 2 日　『教会讃美歌』第 425 番 第 2 節

第 3 日　「朝の礼拝：平安のため」、『日本聖公会祈祷書』、p. 33）

第 4 日　福山四郎訳「大教理問答書」、『ルター著作集第一集』第 8 巻(改訂 2 版)、聖文舎、1983、p. 386

第 7 日　「聖餐式：祝祷」、『日本聖公会祈祷書』、pp. 183-184

第 3 週　第 2 日　「特祷：降誕後第 1 主日」、『日本聖公会祈祷書』、p. 202

第 3 日　cf. 『日本聖公会祈祷書（1938 年）』p.363

第 4 日　青山四郎訳「ドイツミサと礼拝の順序」、『ルター著作集第一集』第 6 巻、聖文舎、1963、p. 433

第 5 日　『教会讃美歌』第 450 番 2 節

第 6 日　塚田理『イングランドの宗教』、教文館、2006、p.512

第 7 日　「朝の祈り、夕の祈り、食事の感謝」、ルター研究所訳『エンキリディオン　小教理問答』、リトン、2014、pp. 55-56

第 4 週　第 1 日　『イングランドの宗教』、p.514

第 3 日　『教会讃美歌』第 358 番

第 4 日　「善い行いについて：第二十九」、ルーテル学院大学 日本ルーテル神学校ルター研究所 (編)、『ルター著作選集』、教文館、2005、p.164

第 5 日　『日本聖公会聖歌集』第 328 番
Timothy Dudley-Smith (1926-)
Copyright © 2018 by Hope Publishing Company, Carol Stream, IL 60188 (著作権許諾申請済)

第 6 日　「特祷：特定 22」、『日本聖公会祈祷書』、pp. 236-237

第 7 日　「諸祈祷：46. 随時に用いる祈り(2)」、『日本聖公会祈祷書』、p. 135

第 5 週　第 1 日　『教会讃美歌』第 162 番 1-4、6 節

第 2 日　『日本聖公会聖歌集』第 414、415 番

第 3 日　江口再起訳

第 4 日　庄司篤訳『アシジの聖フランシスコの小品集』、聖母の騎士社、1988、pp. 49-52

第 6 日　日本聖公会管区事務所 Web サイト、
http://nskkiinkai.blog116.fc2.com/blog-entry-493.html

第 7 日　「大教理問答書」、pp.403、405

第 6 週　第 1 日　「朝の礼拝：平安のため」、『日本聖公会祈祷書』、p. 33

第 2 日　ルター研究所訳『アウグスブルグ信仰告白』、リトン、2015、pp. 25-26

第 3 日　「平和を求める祈り」、女子パウロ会 Web サイト「Laudate」、
http://www.pauline.or.jp/prayingtime/peace01.php

第 4 日　『アウグスブルグ信仰告白』、pp. 26-27

第 5 日　「特祷：特定 4」、『日本聖公会祈祷書』、p. 227

第 6 日　江口再起訳

本文

第 1 週　序　J. モルトマン（喜田川・藤井・頓所訳）『聖霊の力における教会』、新教出版社、1981、p. 101

第 1 日　「大教理問答書」、p.467

第 5 日　小林稔訳「異端論駁 4」、『キリスト教教父著作集　第 3 巻 II　エイレナイオス 4』、教文館、2000、p. 75

第 6 日　鬼塚敬一訳『ジョージ・ハーバート詩集』、南雲堂、1986、p. 395

第 2 週　序　Anne Burghardt (ed.), *Liberated by God's Grace* (Geneva: Lutheran World Federation), https://www.lutheranworld.org/content/resource-reformation-booklet-liberated-gods-grace
cf. William H. Vanstone, 'A Hymn to the Creator',『日本聖公会聖歌集』第 499 番

第 1 日　三浦義和訳「キリストの聖餐について、信仰告白　1528 年」、『ルター著作集 第一集』第 8 巻、聖文舎、1971、p. 328

『エンキリディオン　小教理問答』、p. 53

第 3 日　マリアの賛歌のこのパラフレーズの初出は、Zephania Kameeta, *Why, O Lord? Psalms and Sermons from Namibia* (Geneva: World Council of Churches, 1986)

第 3 週　序　https://www.lutheranworld.org/sites/default/files/salvation_0.pdf

第 1 日　「大教理問答書」、p.386

大崎節郎訳「マルコ福音書九章二四節」、『ボンヘッファー説教全集 3』、新教出版社、2004、p. 90

第 4 週　序　https://www.lutheranworld.org/sites/default/files/human_beings_1_0.pdf

第 2 日　池田修訳「49 部屋の章」、藤本勝次（責任編集）『世界の名著 17　コーラン』、中央公論社、1979、p. 468

第５週　序　https://www.lutheranworld.org/sites/default/files/dtpw-2017_booklet_creation_0.pdf

第６週　序　ディアコニアについては、聖公会－ルーテル国際委員会(ALIC III)の「エルサレム報告書」、*To Love and Serve the Lord. Diakonia in the Life of the Church* (Geneva: The Lutheran World Federation/Anglican Communion Office, 2012)も参照。

第２日　cf. トールビョールン・エグネール（鈴木武樹訳）『ゆかいなどろぼうたち』、学習研究社、1966、1991
cf. 『キリスト者の自由：訳と注解』、p. 15

第７日　『キリスト者の自由：訳と注解』、p. 37
山内宣訳「キリスト者の自由（ラテン語版）」、『ルター著作集 第一集』第２巻、聖文舎、1963、pp. 381、384
「朝の礼拝：平安のため」、『日本聖公会祈祷書』、p. 33

原書 *Liberated by God's Grace: Anglican–Lutheran Reflections* について

黙想のためのこの資料は、私たちが現代の教会として、聖公会やルーテルの教会であるために召されていることを黙想するために、聖公会－ルーテル調整国際委員会（ALICC）の委員により作成された。

ALICC 委員 （2013–2016）（敬称略）

聖公会：

ティモシー・J・ハリス、オーストラリア（共同議長）
ダルシー・ドラミニ、スワジランド、南アフリカ
オーガスタ・レオン、香港
ジョン・リンジー、スコットランド

アリソン・バーネット・コーワン、アングリカン・コミュニオン・オフィス（共同書記、2013-2014）
ジョン・ジボー、アングリカン・コミュニオン・オフィス（共同書記、2015-2017）

ルーテル：

マイケル・プライス、カナダ（共同議長）
ジョイセリン・フレズ・ニャマ、タンザニア
ソーニャ・スクープチ、アルゼンチン
ニコラス・タイ、香港

アンネ・ブルクハルト、ルーテル世界連盟（共同書記）

日本語訳について

- 本書の原本は以下である。

  Liberated by God's Grace: Anglican-Lutheran Reflections

  (The Lutheran World Federation and Anglican Communion), 2017

  https://www.lutheranworld.org/content/resource-liberated-gods-grace-anglican-lutheran-reflections

  http://www.anglicancommunion.org/media/287200/dtpw-anglican-lutheran-reflections-2017-en.pdf

  （ルーテル世界連盟とアングリカン・コミュニオンの両 Web サイトに、同一内容の PDF が置かれている）
- 聖書引用は、原則として『聖書　新共同訳』によった。
- 黙想のためのテキストという本書の性格を考え、本文中には引用箇所を示していないが、巻末に記載した出典より明らかであることから諒とされたい。
- 引用部分は、原則として原文を尊重したため、標記や用語について他の部分との整合性が取れていない場合がある。
- 本文中、［　］で囲った小字の部分は訳注である。
- ルーテルと聖公会で異なる用語については、著者の所属教派のものを主とし、他のものをかっこに入れて示した。

翻訳作業は、聖公会・ルーテル両教会のエキュメニズム委員会がそれぞれ 5 名ずつの翻訳委員に委嘱し、分担して進められた。原則として、ルーテルの著者のものはルーテルの委員が、聖公会の著者のものは聖公会の委員が翻訳した。また、江口再起委員（ルーテル学院大学教授、日本福音ルーテル教会エキュメニズム委員）には、ルターの著作よりのいくつかの引用を訳して頂いた。

最終的には市原信太郎委員（日本聖公会エキュメニズム委員）が全体を調整した後、日本聖公会・日本福音ルーテル教会エキュメニズム委員会による確認・承認を得た。翻訳・編集作業に奉仕してくださった方々に、両教会の委員会より厚くお礼申し上げる次第である。

日本語版翻訳委員

ルーテル： 安藤 風　中野 智之　林 めぐみ
森下 真帆　大和 由祈

聖公会： 上平 更　酒井 悠里　大和 孝明
吉岡 澄麗　市原 信太郎（編集）

文書デザイン：　永谷 亮（聖公会）

神の恵みによる解放
聖公会－ルーテルの黙想（PDF 版）
【非売品】

2018 年 5 月 20 日発行

編者　聖公会－ルーテル調整国際委員会 (ALICC)
翻訳・発行者　日本聖公会　エキュメニズム委員会
日本福音ルーテル教会　エキュメニズム委員会
発行所　日本聖公会管区事務所
〒162-0805　東京都新宿区矢来町 65

ISBN978-4-908946-02-8　C0016

THE LUTHERAN WORLD FEDERATION

ANGLICAN COMMUNION
IN OVER 165 COUNTRIES

ISBN978-4-908946-02-8 C0016